
イチの魔法使い

真実の語りべ w w

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イチの魔法使い

【Nコード】

N1784M

【作者名】

真実の語りべww

【あらすじ】

生まれて、不運なことが魔法を行使することのできない男のこの悲惨かもしれない物語。主人公は、原作の強い人達（キュルケ、ルイズ）などなどを嫉妬の目で見ます。最初のほうは嫌っています。それがだめな方はウターンしてください。7割が作者の妄想です。そういうのもだめな人はウターンしてください。

序章〈これが僕〉（前書き）

この作品は、作者の魔法の勝手な解釈があります。そのところは許してください。できるだけ分かりやすいように解釈しています。まあ、作者にしか適応しないかもしれないけど。

序章　これが僕

僕の名前は、ルーラ・ルイ・ラーク。今年、このトリスティン魔法学院の一年生になったんだ。

生い立ちはいたって普通だった・・・ある一点を除けば・・・僕は魔法が使えない・・・

序章　これが僕

魔法とは、自分の精神力をつかい、魔力を操る技術だ。そのことを知ってる人は少ないが・・・

そして、魔力子によって、効果が違う。例えば、火属性の魔術の魔力子は火が炎能力に優れた魔力子だ。

錬金のときに使う魔力子は、原子操作を可能にした、スーパーにすごい魔力子だ。この世界の人は原子操作をこんなに簡単にしている。そして、コモンマジックのレビテーションなどの魔力子はただ物理干渉ができるようになるだけだ。

しかし、僕は自分の体から魔力子を飛ばすことができない体質らしい。貴族に生まれても魔法が使えない。

そう、コモンマジックすら使えないのだ。一つの魔法を除いては。

その魔法は『ブレイド』と言う魔法だ。魔力子を自分の杖に集め、それを高速回転させることで物を切る魔法だ。

チェンソーみたいなものだ。この魔法は自分の体から魔力子を飛ばさずに済む唯一の魔法とも言える。

だから、僕はコモンマジックは使えなくともブレイドだけは使えるように努力した。

ブレイドを初めて早5年ぐらい経つ。5年間ずっとブレイドだけを磨いてきた。

元々、僕の精神力の量は一般貴族の平均を下回っていた。だから、一日にできて5、6回が限界だった。

しかし、ブレイドは一回出せば、大きさを変えない限りは精神力を使わないのだ。僕にはピッタリの魔法だった。

そして、今年僕は魔法学院に入学した。

もちろん、魔法ができないから魔法の勉強など一切していない。できないのだから、する意味がないのだ・・・なんだか言ってて悲しい。

希望も何もないのだから、勉強するだけ無駄な状態なのだ。できて進級に必要な程度だ。それ以上はないし、いらない。

元々、僕の家が変で、この魔力子のお話するのが好きらしく、3、4歳の時に聞かされるのだ。

魔法がほとんど使えないメイジ。貴族と書いてメイジと読ませるこの世の中だと、僕の居場所などごく少数しかないのだ。

そんな、ことを考えるとこの学院でいい学院生活がすごせるかが心配になってきた。

そんな、不安を振り払うように、頭を振り、僕は学院の門をくぐった・・・

序章「これが僕」(後書き)

以後もよろしくください。これからも読んでください。

第1話　僕的生活（前書き）

次回は召喚できが、ご都合主義で、召喚はできません。

第1話　僕的生活

「朝ですよ、ルーラ様」

朝の日差しが差し込んでいる。今日も朝がやってきた。

「ん・・・後5分寝かして・・・」

どうせなら、ずっと寝ていたいよ。

「もう。そんな事言う人はいつも5分以上寝るんです。」

と、言って布団？シーツをはがされる。

「寒いよマリア・・・わ、分かったから、服を剥ぎ取ろうとしない
で！」

と、言っですごい速さで着替えを済ます。

「分けばいいのです、分かれば。」

と、言っ部屋の外にでてトレーで朝ごはんをもってきてくれる。

「朝ごはんですよ。」

「ありがとう、マリア」

そう、僕は食堂で皆と一緒に朝ごはんを食べない。ささやかな糧と
か言っ、朝からものすごい豪華な食事が出される。はっきし言っ
て僕は朝はあまり食べないほっだ。それに・・・

第1話　僕的生活

マリアは僕が実家から連れてきた専属のメイドだ。昔からお世話になっている。僕より2、3歳を取っているせいで、昔から姉のような存在と化していた。

朝ごはんを部屋で食べ終わると、僕は授業に急いだ。授業といっても、俺は何もしない。勉強は進級できる程度でできればいいのだ。どうせ使えないのだから。

授業なんて適当に聞いとけばいいだけだ。

「はぁ・・・」

授業がつまらなすぎる・・・

「ミスタ・ラーク、私の授業はそんなにつまらないかね？」
誰だっけこの先生？ああ、ギトーか・・・

「ええ、とてもつまらないです。」

素直に言うべきだろう。

「君はこのようなことをしているからあのような二つ名を得るのではないかね？」

そう、僕が朝ごはんを皆と別に取り除く理由。僕はバカにされるのだ。

「それはまったく関係ありませんよ。そして、あなたに言われる筋合い也没有せん。」

「はっ！先生にたてつくのはやめろよ『単一のルーラ』」
そう、これが俺の二つ名。『単一』一つしかない。魔法は一つしか使えない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう、言い返すことができない。その名前は真実なのだから。

「はっ！だんまりかい！さすがは単一のルーラ！僕に対抗するのと先生にはむかうのを同時にできないのか！」
「なにも言い返せない。」

「もう、いいです。」

そう、言ってぼくは一つの窓を開ける。そして・・・

「おい！何をしよう」

「

「さようなら。」
窓から脱走した。

外でのこと

「ルーラ様、また抜け出したんですか？」
「 MARIA が現れた。」

「ああ・・・・・・・・」

「まったく、しょうがありませんね。」

「ありがと・・・僕の味方をしてくれるのは MARIA だけだよ・・・」

「そんなことはありませんよ？ルーラ様が他人とかかわらないだけです。」

「他人といるのが怖いんだ。突き放されると思うと・・・それなら、知り会わないほうが楽な気がするんだ」

「まったく、何でルーラ様はそこまで他人を怖がるのですか？」
そういつて、会話は途切れた。

僕は魔法を普通に使えるやつ等が憎い。ヴァリエールだって、失敗とか言ってもちゃんと魔法として、発動されている。今年はトライアングルが2人もいる。有名な家名のやつ等だってたくさんいる。そのやつ等が全員憎い。俺の努力してもできない魔法を、あいつらは生まれながら持っている。

そんな感情を渦巻きながら、俺の一年はものすごい勢いで流れた。

そして、それは進級試験。使い魔召喚の儀式がやってきた。

第2話　召喚！？　トラップカードはない！？　（前書き）

サモン・サーヴァントはなぜかできます。ご都合主義ですみません。

第2話　召喚！？トラップカードはない！？

今日は学校はない。

学校がないなら別に寝てていいじゃないかと思ってたんだけど。

今日は、あれだ！いわゆる、運命の日ってやつだ！

そう、今日は召喚の儀式の日だ。

第2話　召喚！？トラップカードはない！？

俺は早めに校庭（？）に行った。案の定コルベール先生しか、いなかった。

「おはようございます、コルベール先生。」

「おはよう、ミスタ・ルーラ」

コルベール先生は火の魔術師で、貴族とは思えないほどのチキンと言われている。

僕的には、人間生きてないと意味がないから賛成だけだね。

「やつぱし、まだ誰も来ませんね。」

「それもそうだろう。まだ儀式まで45分もあるからね。」

「あはは・・・そうですね。」

やべえー、30分間違えた・・・

それから、俺は草の上で寝た。まったくりと寝ました。

44分後

ざわざわ

ざわざわ

ああ、うるさいな・・・

そろそろ始まるのか・・・はあ、嫌だな・・・どうせ、俺なんて、ナメクジとか出しそうだし・・・

そして、一人ずつ召喚することになった。

俺の番がやってきた。

名前順に行くと俺が最後になるんだが・・・ルイズ・中略・フランソワーズは召喚に時間がかかると予測され最後になっている。

俺が前に出る。少しざわめく・・・そりゃそうだろう、俺は今まで『ブレード』しか使ったことがないからね。できるか、自分でも不安だ。

「我、ルーラ・ルイ・ラークが呼ぶ。我が運命を変える者よ・・・」
このセリフは基本自由だ。

そして、前にゲートが開く。どこか不可思議なゲート・・・厚さはない。しかし、向こう側は見えない。まるで、鏡のよう。しかし、表面は水面のように波打ってる。

そして、次の瞬間その波は止まった。何かがゲートから出てくる。

そして、召喚は終了した。

前には、普通のサイズの猫。

色は茶色で模様もなし。完璧に普通の猫だ。

「はっ。さすがは単一のルーラ！ただの猫じゃないか！模様もない！色が一つだ！」

「そこ、うるさいですよ。さあ、ミスタ・ルーラ契約を。」

「はい。」

と、言うてばくは猫を持ち上げ、顔に近づける。

「我が名は、ルーラ・ルイ・ラーク。五つの力を司りしペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ……」

そして、俺は人生で始めて猫にキスをささげた。そして、猫が少し唸ると、治まり、僕の手の中から逃げた。そして、それをコルベール先生が捕まえる。そして、おなかのところを覗く。

「ふむ、これは『意思疎通』のルーンだね。珍しくもないが、役に立つぞ。」

「そうですか……」

平凡だな……いや、成功できただけでもよしとしよう。これで、一様俺はメイジってことだしな。

「すこし、疲れたんで部屋に帰っていいですか？」

「ああ、いいとも。次の召喚は時間が掛かるだろうしな。」

「ありがとうございます。」

次の召喚はルイズ・中略・フランソワーズだ。時間が掛かるに決まっている。

部屋

僕は今ベッドになっところがつている。猫と一緒に。

「うん・・・君の名前はとうしようか？」

「にゃー」

「うん、シュレディンガー？とかだめかな？」

『いやだにゃ』

「うお！？こ、これが『意思疎通』か・・・びっくりした。」

『俺もびっくりだにゃ』

「そうなんだ・・・で名前はなににしよう？スコールとかは？」

『それは、雨だにゃ』

「じゃー、インフェルノからとって『フェルノ』なんてどう？」

『それがいいにゃ』

「て、いうことは君は火属性に連なる使い魔なんだ。」

『そうだにゃ、ルーラも火じゃないかなにゃ』

「はは、そうだね。珍しくもないか。」

火つていっても、僕にはあまり関係ない話だけどね。

『それにしても、ルーラの召喚はとっても不安定だったのにゃ。やつとの思いでこっちにこれたにゃ。』

「ごめんね。僕は魔法が使えないんだ。」

『使えないというと？』

それから、フェルノに僕の魔法について説明した。

10分後

「お昼をもつてまいりましたよ」

「マリアお帰り。」

「にゃー」

「その猫はなんですか？」

「僕の使い魔だよ。かわいいだろう？フェルノって名前なんだよ。」

「ルーンは『意思疎通』だよ。僕はフェルノと会話できるんだけどね。」

「そうですか。これで一安心ですね。ルーラ様もこれで、立派なメイジです。」

「ありがとう、マリア。でも、僕は全然立派じゃないよ。」

そう、俺は全然立派なんかじゃない・・・

魔法を使えないメイジが立派であるはずがないから。

「けどね、マリア。僕は立派なメイジじゃないからこそ、ここまで逃げて来れたんだと思う。それだったら、僕は立派なんていらぬ名誉だつて捨てるよ。」

「それは、貴族とは思えない発言ですね。まあ、それがルーラ様ですけど。」

「あはは、そうだろう?。」

そして、その日もいつものように終る。

今日は、猫が一匹増えたけど。

第2話　召喚！？トランプカードはない！？（後書き）

主人公は、基本チキンです。闘いなんてなければいい、と考えています。

第3話　才人との出会い（前書き）

更新がひどく遅れました・・・すみません。

第3話　才人との出会い

今日は非常に早く起きてしまった・・・
その理由とは・・・

「にゃー。にゃー。」

フェルノだ・・・

「ん・・・どうしたんだ、フェルノ？」

『お腹が減ったにゃあー』

そつえば、昨日からなにもあげてないな・・・

「ふああ・・・分かったよ。うん」

背伸びをして少し考える・・・そうだ厨房に行こう。あそこなら餌くらいあるだろう。

「よし、じゃー、着替えたらすぐ行こうか。」

「にゃあー」

第3話　才人との出会い

厨房

「お邪魔します。」

「にゃあー」

と、厨房に入っていくと。

「き、貴族の坊ちゃん！マルトーさん呼んでこい！」

「いや、別にそこまでのようじゃないんだけど？」

そして、厨房のほうから一人のでかい、本当にでかい人が来た。

「なにか、不憫でもありましたか、貴族の坊ちゃん」

「いや。なにもないよ？ただ、使い魔の餌が欲しいだけなんだけど。」

「

「そうでしたか。で、どんな使い魔ですかね？」

「にゃー」

「猫ですか。へい、わかりました。では、魚を数匹持ってきてくれますか。」

と、言って30秒後に魚を持ってきてくれた。

「ああ、ありがとう。それでは、お邪魔しました。ご機嫌よう、皆さん。」

と、言って厨房を出て行く。

食堂横

「ほら、フェルノ。餌だよ。」

『ありがたや、ありがたや』

「ふうー、朝は苦手だなやっぱし。それにしても、やっぱし平民って朝早くから働いてるんだな。」

ただいまの時刻は学校の始まる2時間前である。

「ふああー、暇だ。寝るわ。フェルノ、人通りが多くなってきたら起こしてくれ。」

『了解だ。』

「おい、アイツ何だ？あいつも貴族か？」

「あ、アンタ、貴族に決まってるでしょ！そんな口聞いちゃだめっでずっと言ってるじゃない！」

「い、いや、だって。その辺で寝てるし、昨日は見なかったし！」
「こんな、会話で起こされた。不愉快だね。非常に不愉快だ。でも、あくまで物腰やわからかに。」

「うるさいですよ。人が折角寝てるのに・・・」

「あ・・・ごめんなさい。」

と、言って黒髪の少年が謝ってくる。

「あ、アンタ！私には謝らない癖に他人には謝るのね！いい度胸じゃない！」

「そういった、態度を取っているからそうなるんだよ？気をつけるといいよ、ミス・ヴァリエール」

「そ、そうだ、そうだ！」

「あ、アンタはうるさい！」

「で、それより、彼は？見た感じ貴族じゃないね？しかも、黒髪・・・珍しい。」

「あ、ああ。俺は平賀才人。こっちで言うサイト・ヒラガだ。」

「そうか、サイト・・・なあ、手を貸してくれないか？」

「ああ、別にいいぞ。」

と、言つてサイトが僕の右手を握つて引つ張つてくれる。

「ありがと、サイト。君は優しいね。」

「はは、何言つてるんだ？これぐらい普通だろ？」

「ここじゃー、それが普通じゃないんだ。まあ、僕のご主人様から聞くといいよ？それじゃ、僕朝ごはんまだなんだ。」

と、言つてそこから走つて部屋まで戻る。

SIDE才人

あいつは優しかったな。他の貴族とはなんか違う感じがする。つて、俺名前も知らないじゃないか・・・それにしても、あいつ、食堂こつちなのはどうしたんだろ？

「なあ、ルイズ、あいつ誰だったんだ？」

「ああ、あいつは同じクラスのルーラ・・・苗字は忘れたわ。二つ名は『単一』よ。単一のルーラって呼ばれてるわ。」

「へえ、単一ねえー。なんかかつこいいじゃん。」

「かつこよくなかないわよ。『単一』の意味分かる？一つって意味よ？あいつは魔法を一つしか使えないからそう呼ばれてるのよ。」

「そ、そうなのか？なんか、可愛いそーだな？」

「可愛いそー？それなら私の方が可愛いそーじゃない？魔法が一つも使えないのよ？」

「お前は使えてるじゃないか？爆発するじゃん？あいつは何も起こらないんだろ？そつちのほうが・・・虚しいな。」

そして、ルイズがなにかに気付いたかのような顔をした。

SIDE OUT

「まったく、ルーラ様どこに行ってたんですか？朝ごはんは用意できてますよ？」

「ああ、ありがとマリア。いや、ちょっとフェルノの餌をもらいに厨房に行った後そとで寝ちゃって。」

「まったく。」

「あ、でも。ヴァリエールの使い魔にあつたよ。人間だった。不思議だったな。」

「人間の使い魔ですか？珍しいですね。」

「だろう？もうちょっとよく知りたいな。ご馳走様。」

「早いですね？」

「ちょっと、似合わずワクワクしてきたんだ。」
「そういつて、僕は部屋から出て、教室に急ぐ。」

教室に急ぐ

僕の周りには当然と生徒は寄ってこない。まず、僕には友達がいない。そんな僕がすることは一つだ。寝る。

そして、僕はまた眠りについた。フェルノも寝てるし。こいつ気持ちいな。

ドガーーン！！！！

「うおー!」「ぎにゃ!」

そんな、感じで起こされた。マリアよりひどい!

はあ、またヴァリエールかよ・・・派手すぎるんだよ!

そして、今日の授業は中止になった・・・

自室

「はあ、ヴァリエールもやってくれるよ・・・俺の安眠を邪魔するなんて・・・」

そんなことをぼやいて部屋から出ようとすると、向うのほうから黒髪の才人が走ってきた。

「おお、才人じゃないかって、なんでそんなに走ってるんだ?」

「る、ルーラ、匿ってくれ!頼む!」

「わ、分かったから、は、早く入れ!なんだかすごい嫌な予感がしてきた。」

「あ、ありがとう!恩に着るよ!」

そうして、才人が俺の部屋に走りこむ、そして、すぐさまドアをものすごい勢いで閉める。

「で、どうしたんだ?」

「い、いや、ルイズのことを『ゼロ』ってからかったら・・・殺されかけた・・・」

「それは、そうだろう・・・貴族はプライドだけで生きている生き物だ。それにヴァリエール家の三女となればプライドなんて山より高く海より深いぞ。」

「そ、そうなのか？そのわりに、お前は気にしてないみたいだけど？」

「・・・俺は、貴族より平民のほうが似合ってるからな・・・」

「あ・・・ごめん・・・そうだったな、ごめんルーラ。」

「いいよ、別に。もう言われ慣れてる。」

「それにしても、ルーラはなんで魔法が使えないんだ？ルイズだって失敗しても爆発だろ？」

それから、俺は才人に魔力子の話をしてやった。

「そ、そうだったのか・・・なんか気の毒だな・・・」

「いや、そうでもないよ。そのおかげでブレードだけはすごいからね。あと、少しオリジナルも考えてある。」

「へえー、なんなんだそのオリジナルは？」

「いつか、みしてやるよ。」

と、その後は世間話をしていると。

ガチャッ

ビクッ
ガタッ

と、マリアが部屋に入ってきて、才人が机の後ろに隠れた。

「あー、大丈夫だぞ才人、俺のメイドだ。あと、マリアドアを閉めてくれ。」

「はい、分かりました。それにしても、ルーラ様もやっと自分の部屋に・・・ふふふ」

「お、お前のメイド？専属とかか？」

「ああ、そうだ。メイドのマリアだ。マリアこっちはヴァリエールの使い魔の才人だ。」

「はい。私はルーラ様の専属メイドをやらせて頂いているマリアです。以後お見知りおきを。それでは、これを。失礼します。」
と、言つて、テーブルの上にクッキーを置いていつて、退出した。

「マ、マリアさんか。お前のメイド？」

「ああ、ウチの実家からつれて来たんだ。一人はさすがに寂しいからね・・・」

「貴族ってなんか生まれながら勝ち組なのか？いいなあ、いいなあ貴族。」

コイツ！ニヤニヤするな！

「マリアに手を出したら殺すぞ？俺のただ一人の従者だからな。」

と、言うと才人は潔く『はい・・・』といつてくれた。

「にゃあー！」

「ああ、今はお前も俺の従者だな。」

「お！猫じゃないか！いいな、こいつ普通で！いやあ、他のやつ等
はもう、竜とか変なのでビックリだよ！」

「褒め言葉として受け取っておくよ。」

と、その後も世間話をしていると夕飯の時間になっていたので、才
人と帰らせた。まあ、無事を願うよ。

第4話　決闘、才人の世界（前書き）

いやあ、なんだか感想をもらうと、とってもうれしいです。そして、ネタがぽんぽん浮かんできます。書いているうちにキャラが変わってしまいかもしれませんが・・・

第4話　決闘、才人の世界

それは、突然の出来事だった。

「諸君！決闘だ！」

一人のバカがこんなことを言ったのだ。

第4話　決闘、才人の世界

なんだか、大変なことになっているらしい。

なんでも、才人がギーシュを怒らせて決闘騒ぎだとか？

はあ、あいつは暇なのか・・・暇なんだろうね・・・

才人はまだ、こっちに来たばかりで武器の一つももっていないのに・・・

貴族の名が廃れるぜい？

「あ・・・そうだ。たしか、『あれ』があつたな。」

と、言っただけは部屋の隅にある箱をあさりだす。

SIDE 才人

なんだか、決闘になった。

しかも、元はと言えば、あのギザ男が悪いのに・・・二股なんてす

るもんじゃないぞ？

はあ、しかもなんだかルイズが俺のことすごい止めようとするし・・・俺があんなギザ男に負けるとでも思ってるのか？

「逃げずに来たことを褒めてあげよう。」

「ああ、どうもありがとうございます。」

本当にここらへんルーラと違うよな・・・貴族ってバカばっかなのかな・・・ルイズもバカだし・・・

「ふっ、僕はメイジだ。だから、僕は魔法を使う。文句はないね？」

「はっ、お前に言う文句なんてもったいないだろ？」

「あ、アンタ！何てこと言ってるのよ！あやまりなさい！これ、主人命令！」

「俺があんなギザ男に負けるか！？」

「ま、負けるに決まってるでしょ！相手はメイジなのよ！？平民が勝てるわけじゃない！？」

「そうとは限らないんじゃないかな！？」
と、上のほうから声がする。見上げると

「ルーラ！来てくれたのか？」

「ああ、そうだ、ミスタ・グラモン。あなたは、メイジで魔法を使う、なら彼は平民だ。武器を使う許可を。」

「ああ、それぐらいならいいだろう。武器を持ってきたのか？」

「ええ、決闘とは公平だから成り立つんです。一方に条件が偏ったときそれは虐待と言うんですよ？」

と、言つてルーラは俺のほうに近づいてきて、俺に武器を渡す。その、武器とは

「つて、これ『刀』じゃなか！？なんで、これがここにあるんだよ！？」

「刀？このこと？」

「あ、ああ、これを俺の世界だと刀つて言つんだ・・・」

「『俺の世界』？なんだか面白そうな話だね。終わったら聞かせてよ。」

「ああ、いいぞ。お前にだったら話しても。」

「じゃー、がんばつてきてよ。」

「おお、がんばってくるわ。」

それは、どこか、日本でも味わったような感覚。まるで、友達。いや、もう友達だった。

SIDE OUT

「ちよつと、アンタ！なに、私の使い魔送り出してるのよ！？止めなさいよ！？」

「なんで、止めるんだ？」

「き、決まってるじゃない！じゃないと、私の使い魔死んじゃうじゃない！？」

「死ぬはずないじゃないか。彼は勝つよ絶対に。」

「なんで、そんなこといえるのよ！？」

「まったく、コイツは自分の使い魔も信じられないのか？」

「自分の使い魔を少しは信じてみればいいじゃないか？その時点で君はメイジ失格だよ。」

「な、何てこと言うのよ！？あんたこそ、一つしか魔法使えないくせに！ほとんど平民じゃないの！！」

「お前、うるさいぞ？まず、平民だからって何だ？貴族なんてそんな偉いもんじゃないんだよ？」

「は？何言ってるの？貴族が偉くなくてどうするのよ？馬鹿なんじゃないの？」

「馬鹿はお前だろ？これが分からない時点で、お前はメイジと貴族両方とも失格だ。」

「なっ！アンタふざけんじゃ」

その、言葉を聞く前に僕はルイズから離れた。

勝負は一瞬で決まった。当然才人の勝ちで。しかも、人とは思えないほどの速さで。あれは、達人の域を超えている・・・
そのときに、ルイズがものすごく面白い顔だったので、笑ってやったら、ものすごい怒って、才人を引きずって帰っていった。
俺のカタナ？だっけ？返せよ。

まあ、いいけど。どうせ後で才人が話し聞かせてくれるんだし。
俺は、そこから、一人になるために人ごみから離れ、校舎(?)の裏の気がないところに行く。

「ああ、寝みいな。どっかで、昼寝でもするかな？」

「にゃあー」

「お前もしたいか？やっぱ、お前って俺の使い魔だな。」
そして、俺は木を登り、太い枝にすわり、幹に背中を預ける。フェルノを腕に抱き、昼寝のモーションに入るとき・・・

「ヒック・・・う・・・う・・・」

泣き声が聞こえてきた・・・

「はあ、誰だよ、こんなところで泣いてるの？」

と、言っただけで聞こえてきたほうを見ると、そこにいたのは少女だ。
あの、制服を見るとあれは1年生である。栗色の髪をしている。

「あれを俺に慰めると？」

『そうじゃないかにや？ここで慰めが成功したらすかれるにや。』
僕も一応男であって、女性に好かれるのは悪くない、というか良い。

「私・・・ギーシュ様を愛していました・・・一緒に遠乗りに行つたときも・・・とても、うれしかったんです・・・でも・・・でも・・・」

彼女はポツリ、ポツリと喋りだし、そして、また泣いた・・・

「あー、今さっきの決闘の原因が・・・」

「他の皆は・・・やめたほうが良いとか、浮気されるのがオチとか言っていました・・・けど、私はギーシュ様を信じていました・・・そして、裏切られたんです・・・」

ああ、かわいそー・・・ギーシュってなんて奴なんだろ・・・殺してえー

「そつか・・・それは・・・なんていうか・・・気の毒だね」

「うう・・・ヒック・・・」

また、泣き出したよ・・・どうしよう・・・くそ・・・これまで、人を慰めるなんてしたことねえんだよ！どうすりゃいいんだあああ！？ここはあれしかない・・・『俺の胸ぐらいなら貸したやるよ』作戦だ！

「ぎ、ギーシュじゃなくて嫌かもしれないけどさ・・・ぼ、僕の胸ぐらいなら貸してあげるよ？」

この言い方で合ってるのか・・・？つか、いきなりこんなこと言っているのか！？

「う・・・う・・・」

そんな、ことを考えてる僕とは違い、彼女は僕に近づき、僕の胸に顔を埋め、泣いた・・・そんな彼女を俺は抱くことしかできなかった

た・・・もつと、ちゃんと慰めればよかったのに・・・

彼女が俺の胸で泣き始めてからどれくらいの時が経っただろうか・・・
・5分？10分？はたまた、30分？

まあ、時間が経った。

彼女はいまだに、俺の腕の中にいる。もう、泣いてないけど・・・
そして、なんだか、離れるにも離れなくなってしまった。そんなところ
に救世主登場！

「おお、ルーラいたいた、って、うを！」

才人が来たああああ！！

人の声に反応して彼女は俺から離れる。二人とも、赤面である。目を
合わせることもできない・・・恥ずかしい・・・

「あ、ああ、あの、すみませんでした・・・なんだか、迷惑かけて
しまつて。染みまで作つてしまつて・・・」

俺の胸には、彼女のないた跡ができている。それくらい、彼女は泣
いたのだ。ギーシュ許すまじ・・・

「い、いや、いいよ。君みたいな女性を抱けるなんてめつたにない
からさ、役得だったよ。それに、気分も晴れただろう？」

「は、はい。ありがとうございました・・・気分も晴れましたし、
落ち着きました。ありがとうございました・・・えーと・・・」

まだ、名乗ってなかったか・・・

「僕の名前はルーラ。ルーラ・ルイ・ラーク。ルーラって呼んで。」

「私のン名前はケティです。ケティ・ド・ラ・ロツタです。ありがとうございます。もう、そろそろ行かないといけな

「どういたしまして、ケティ。もう、そろそろ行かないといけな

「と、言うとは彼女は時間に気付いたのか、急いで

「ほ、本当にもうしわけありませんでした。こんな、時間まで・・・」

「いや、いいよ、言っただろう役得だったし。女の子はもう帰ったほうがいいかもよ?」

「は、はい。それでは、失礼します!」
と、言うて急いでその場から逃げた。

「お、お前もやるんだな?」

「なんの、話だ才人?」

「いや、今の女の子、彼女だろ?」

「ち、違う!彼女は、君の決闘の原因の二股かけられてた女の子だ。そして、僕は慰めてただけだ・・・時間かかったけど。」

「へえ、あの子が・・・悪いことしたかな?」

「いや、もっと、あの状態が続いてたら、彼女はもっと傷ついただろう。そんなときじゃ、僕では慰めにもならないよ・・・」

「そうか？お前結構さまになってたぞ？」

「褒め言葉として受け取っておくよ・・・で、用事は？」

「そうだった、この刀なんだけど」

「あげないよ？それは、大切な品だからね。曾祖父の遺品なんだ。」

「そ、そうなのか・・・それじゃ、仕方ないな・・・」

「で、君の世界の話だ！早く、聞かせてくれ！」

「ああ、そうだったな・・・お前なんで、そんなにワクワクしてんだよ？」

「興味が沸いたんだ！この品が来た場所だろ？気になる！」

「ああ、そうか・・・じゃー、どこから話そうか・・・」

そして、才人は自分の世界について、語り始めた・・・

曰く、貴族はいない。

曰く、鉄が空を飛ぶ。

曰く、万人が使える技術がある。

曰く、魔法が架空の話。

こんな、世界を話された・・・

「信じがたいな・・・けど、そんな世界があつたら面白いな・・・」

「信じないのか？」

「いや、信じるよ・・・才人の言うことだ。才人は嘘を付けなさそうだからね。」

「あ、ありがとう！お前だけだよ、俺のこと信じてくれるの！」

「俺と普通に接してくれるのもお前だけだよ。」
そういつて、自嘲気味に笑う。

「なんでだろうな？魔法つてそんなに大切なのか？人間つて外じゃなくて中身だろ？」

「そんな、ことも気付かないくらい、こっちの人間は腐っているんだよ・・・芯からね」

「なんだか、お前つてこっちの世界の人じゃないみたいだな・・・こっちの人の考えじゃない。」

「いや、それは、お前がまだ貴族しか知らないからだ・・・平民はみんな俺みたいだよ。ただ、貴族を恐れるけどな・・・」

「そうなのか・・・平民か・・・仲良くなりたいな・・・」

「それなら、ここの使用人と仲良くなったらどうだ？言っちゃ何だが、ここの使用人は美人そろいだぞ？」

「本当か！おし、今後の目標は決まった・・・」
そう言つて、僕と才人は空を見上げる。今はもう、夕方で空が赤くなつてゐる。

それから、暗くなるまで俺と才人は話さなかった。

「なあ、才人・・・」

「なんだ？」

「もしさ、お前がもとに世界に戻るんならさ・・・」

こんなこと、願っていいよな・・・こんな世界俺は未練もない・・・

「俺も、一緒に連れてってくれないか？・・・」

この一言が、暗い空に残った。

才人は、答えてくれなかった・・・

そして、それから、話さないまま俺たちは別れて、部屋に戻ることにした・・・

第4話〜決闘、才人の世界〜（後書き）

女の子とか、書くのとても、苦手です・・・そして。泣き声なんてもってのほか・・・下手で、すみません・・・オリジナル魔法ですが、自己強化はどうやって、細胞とかの話が入ってしまうので、この時代にあわないでの、強化系はできないと思います。意見があったら、感想ください。

第5話 バカは本当にいた・・・（前書き）

いやあ、なんだか、色々キャラ変わってます。ルイズとか悪者ですwwでも、後で、仲を良くしたいとも思ってます・・・ギーシュも・・・と、いうか、ギーシュはできたとしても、ルイズは難しいです。元々嫌いなんで・・・

第5話　バカは本当にいた・・・

この世には、なんていい言葉があるんだろう

『一度あることは二度ある、二度あることは三度ある、三度あることは何度でも起こる』

まったく、その通りだよ・・・

第5話　バカは本当にいた・・・

昨日、才人と話した後、部屋に戻るとマリアに制服の汚れ（染み）のことを聞かれた。

恥ずかしがったが、マリアには正直に話した。

つて、マリア！子を見る母親のような目はやめて！？

そんなこんな（どんな！？）で次の日がやってきて、俺はルイズに文句を言われている・・・

「ちょっと、あんた！昨日の話の続きよ！」

「ああ、うるさいな。なあ、フェルノ？」

「にゃ〜」

「ちょっと！ちゃんと聞きなさいよ！」

「ああ、何？朝からうるさいんだけど？」

「昨日はよくも私のことを貴族&メイジ失格って言ってくれたわね！私が誰だか知って言ってるの？私はヴァリエール家の三女よ！」

「ああ、ああ。そうやって、自分の地位に甘んじる・・・まったく、だから貴族ってのは・・・ハア・・・」

「あんたも貴族じゃないのよ！？」

「少なくとも、俺は自分で喜んで平民を虐げたことはないぞ？それに、俺は貴族なんて腐れがいいと思うよ・・・」

「はあ？あんた、何言ってるの？あんたのところのメイドだっているじゃないの？ちゃんと虐げてるじゃない？それに、平民の存在理由自体が貴族に従うことなのよ？あんた、馬鹿なんじゃないの！？」

「そう思ってるうちは、君はメイジどころか、人間としても考え直したほうがいいかもしれないね？それに、俺はマリアを虐げてなんてない。むしろ愛してる。」

「ああああ、あんた！？よくも、そんな事言ってくれるわね！？人間やめたほうがいいのはあんたじゃない！人の事そこまで悪く言うてくれて！」

「はあ、お前のところの才人は大変そうだな・・・同情するよ・・・」

「あの、犬は私のなんだから、どうしようと、私の勝手でしょう！あんたが、口挟まないで！」

「犬？お前は人間のことを犬呼ばわりしてるのか？」

「そうよ！して悪い！？あんなの犬で十分よ！」

はあ、コイツとは話してて不愉快極まりない・・・死ねって感じた・・・

「そ、そうよ！あんた、勝手に人の犬に施してるんじゃないわよ！？この前は勝手に匿ったんでしょ！？」

「殺されかけている『人』を助けられないほど、冷徹じゃないんでね。」

「『人』？今『人』って言った？ハッ！何言ってるのよ！？あれは『犬』よ！私の『犬』なんだから！」

「お前とは、話すことがないみたいだな。じゃあな。」
と言って、彼女の返事を待つ前にその場を去った。

時は流れて、今は放課後。

僕は、今木陰で本を読んでいる。題名は『この世と貴族』。

これは、ほとんどの貴族の家庭にも置いてある教本だ。

内容は、ルイズが言っていたことを少し穏やかにしたものだ。

曰く、貴族は偉い。

曰く、平民とは貴族の僕。

曰く、貴族こそがすべて。

読んでいて、虫唾が走る。この世のすべてが、否定したくなる。気

持ち悪い・・・

「ああ、こんな本読むんじゃないかった・・・」

『じゃー、なんで読んだにや?』

「次のテスト範囲だ・・・まったく、この学校は魔法だけ教えればいいのに・・・貴族とは何か、なんてくだらない・・・」
と、ため息交じりで俺は呟く

そんな、僕に突然

「あ、あの。誰と話してるんですか?」

と、声がかけられる。僕は本を、パタン、と閉め、声の方向を向くとそこにいたのは

「ケティじゃないか。」

「お久しぶりです、ルーラ様。」
なんで、様なんだろう?

「久しぶりじゃないだろう? 昨日会ったばかりだよ?」
と、言っと、彼女は俯いて顔を耳まで赤くなってる。

「ま、まあ。昨日のことは忘れよう、な?」
と、俺も結構、いや、かなり恥ずかしいので。

「わ、忘れたりなんかしません!」

「え?」

心底、びっくりしました。はい。

「わ、私。と、とても、嬉しかったんです。ルーラ様が私のことを優しく、だだ、抱いてくれて・・・」

そこまで、ストレートに言われると、まじで恥ずかしいんですけど・・・

「そ、そっか・・・それは、なんだか、こっちからしても嬉しい限りだね。」

「うう・・・」

黙ってしまった・・・どうしよう・・・女性と会話なんて、ルイズの口喧嘩（一歩的にさせられてる）とマリアとぐらいしかないよぉ・・・

「け、ケティ。こっち来なよ。涼しいよ？」

別に、影じゃないところが暑いわけじゃない。ただ、話が続かないだけだ。

そして、彼女は返事をせずに、木陰のほうに来て、僕の隣に座る。彼女はいい匂いだった。マリア以外の女性と関わるのは、初めてといっても過言ではないし、マリアはメイドであって、貴族のような裕福な生活はしていない。

と、いうことは、僕は初めて貴族の女性と接触しているのだ。我ながら、情けない・・・

「にゃ」

と、フェルノが「よっ！」と、挨拶するように鳴いた。

「わぁ、猫さんですか？かわいいですね。」

女性とは、かわいいものに弱いと聞くが・・・本当だったとはね・・・

「そうかい？ 気に入ってくれてよかった。フェルノって言って、僕の使い魔だよ。」

「いいですね、こんな使い魔私も欲しいです。」

「本当かい？ もっと、神々しい使い魔が欲しくないか？ ウチのクラスの人なんてドラゴン召喚したよ？」

「そ、そんなものより、もっと穏やかな猫のほうがいいですっ！ ドラゴンなんて・・・食べられちゃうかも・・・」

「はは、さすがにそれは・・・ないと思う・・・たぶん・・・きっと

「ははは。それじゃー、コツを一個教えてあげるよ。」

「コツですか？ 召喚にコツなんて？」

「あるに決まってるじゃないか。自分の欲しいものを強く思えば、手に入るよ。」

「はい、真っ赤な嘘です・・・まあ、ちょっと成功しそうじゃん？

「そう・・・なんですか？」

「そう、思っつけ。」

「はい！」

それから、少し世間話（友達、料理、趣味など）の話をして、また明日もここで会おうという約束までしてしまった・・・少し緊張してました。はい。だってねえー、もともと友達なんてい

ないし・・・女性なんてもつてのほか・・・

まあ、そんな感じで今日と、言う日が終わった。

4日後

今日もケティと会う約束をしている。今日は、魔法を説いてあげる約束をしている。

別に、僕は魔法が使えないだけで、イメージはできている。というより、普通の人よりイメージできる。

それは、使えないものだからこそ、イメージしかできない故に。

そして、今日も木陰にて彼女を待つ。

この4日間、僕は変わった。彼女に接して。

人というものが分かってきた。いまだに、怖いけど。

それでも、彼女は怖くなかった。一応、僕が慰めてあげたし、最後まで見届ける(?)責任を感じている。

でも、だから一緒にいるんじゃない。たぶん、一緒にいたいから一緒にいるんだと思った。

まだ、自分の気持ちは分からない・・・難しいです・・・

「ルーラ様、もう、なんでいつも私より先にいるんですか？」

「ん？5分前行動ってやつだよ？約束しといて人を待たせるのはいけないからね。」

「明日は、普通に来てください。私がルーラ様のことを待ちます。」
えー。なにそれー？最近の流行？？

「わ、分かったよ。明日はそうする。」

「約束ですよ？」

「ああ、約束だ。」

それから、魔法のことを話した。僕の知ってる限りの知識を彼女に伝えた。

魔力子のこと これがあると、イメージは大分しやすいはずなのだ。

このごろ、気付いたのだが・・・これは、たぶん・・・気のせいだ
といいんだが・・・

ちようど、廊下の突き当たりのところに人がいる・・・たぶん・・・
ケティの友達だ・・・
キャッキヤ言ってるのが聞こえるんだよね・・・恥ずかしいいいい！

「で、魔法の話はこれで、終わりだけど？分かった？」

「はい！なんだか、今ならできる気がします！なんだかとってもありがたいです。」

「はは、いいよ。どうせ、こんな知識持っても意味がないんだ。
使えないんだし・・・」

僕が自嘲気味に笑うと、彼女が俯いて、ゴニョゴニョ呟いている。

「・・・る、ルーラ様は魔法が使えなくても・・・あの・・・
そのお・・・」

何が言いたいんだろう？

「・・・私は魔法にかけられたように・・・元気にしてくれました！だから、そんなに、気にしなくても・・・私今でも感謝してます！」

「そんなこと、言われたのは初めてだ・・・けど、僕が魔法をかけたんじゃないよ・・・僕が魔法をかけられてるんだ・・・」

最後のほうは小さい声で言った。こんな、気分初めてだ・・・こんなに、異性と話したのは初めて・・・

「・・・感謝するのは僕なのに・・・」

「なんていつてるんですか？全然聞こえませんかー？」

「な、なんでもないよ！気にしないで！」

こんなの、聞かれたら、俺恥ずかしくて死ぬ！

「なんでも、ないわけじゃないですか！早く教えてください！」
と、言って彼女は追求してくる。なんて、いい雰囲気なんだろう・・・和む・・・

しかし！そんなところに悪の大魔王登場！

ギーシュが来てしまった・・・

「うわっ・・・やっべ・・・」

まじで、やべえー！こんなところ見られたら怒るぞあいつ・・・

「へ？どうしたんですか？って・・・ギーシュ様・・・」

そして、ギーシュはこっちに近づいてくる。

「ああ、僕の愛しのケティ！あの上に本当にすまなかった！けど、僕は決めたんだ！君こそが一番美しい！僕の女神だとね！」
はつきし、言つてきもい・・・をええー

「私も気付きました・・・」

「ほ、本当かね！じゃー、僕の所にー」

「ギーシュ様は最低です！」

「へ？」

俺まで、声でちゃったじゃん！

「私、もう見ました！ギーシュ様が夜な夜なミス・モンモランシの部屋に行っているの！友達も見ました！それなのに、また浮気するんですか！本当に最低です！」

「な、なにを言ってるんだい？僕が夜這いなんてするわけないだろう！僕の愛しの蝶よ！なぜ、僕をそのまで嫌う！」
誰も夜這いとか言つてないぞ！？墓穴掘ったな・・・

「もう、話しかけないください！」

「君は落ち着いてないだけだ。僕の一緒に落ち着こう、この美しい夕焼けを見て。あつちで話そうじゃないか？」

と、言つてギーシュはケティの手首を掴んで連れて行くとする。
本当にコイツは腐ってるんだな・・・

「いやです！やめてください！」

「来るんだ！」

だんだん、乱暴になってくる。僕の心の中になにかがふつふつと沸いてきた・・・

突き当たりにいた、ケティの友達と思わしき人達も動き出した。

「つつ！やめてください！痛いです！」

もう、これ以上は耐えられない！

「止めるー！」

僕は、ギーシュの手を叩き、ケティの肩を抱きこっちに寄せる。

「ルーラ様・・・ありがとうございます・・・」

少し涙目で彼女が見上げている。こんなときに不謹慎だが・・・かわいー！気にしないでください・・・

「ルーラ！邪魔をするな！僕は彼女に用があるんだ！」

「痛がっているだろ！なんで、分かってあげない！」

「なにをだい？彼女が僕のことをどれほど想ってるかかい？それなら、分かっているさ！」

「違う！なぜ分からない！彼女がどれくらい傷ついたのか、お前は分かっているのか！？」

「傷ついた、彼女を慰めるのが僕の役目さ。」

と、ギーシュは自分の髪をいじりながら「ふっ」と言って、決めたつもりらしい・・・

「そんなものいりません！慰めならルーラ様からもらいました！そして、ギーシュ様のはいりません！」

と、「あっち行け」オーラ全開のケティが言う。彼女もこんなに大声出すのか・・・

『なんだ、なんだ？』

『うるさいなあ？何事だよ？』

『おい、あれ見ろよ！ギーシュがこの前二股かけて振られたほうじゃん』

『つか、あれルーラか？なんで、ケティちゃんなんかといえるんだ？』

ちっ！外野が来たか・・・早く、ことを終らせないと・・・

「わかったか、ギーシュ！だから、さつさとどつかへ行ってくれ！そうしないと、この流れだとお前と決闘しないといけないじゃないか！そして、お前また負けるんだよ！」

「こ、こんな屈辱受けたのは、初めてだよ！しかも、平民ごときに！これで、2回目だ！非常に不愉快だ！」

おい！ちよつと待て、俺は平民じゃない！

「ギーシュ様！ルーラ様は平民じゃありません！ギーシュ様なんかより立派な貴族です！」

おい、ケティ！それ言うてくれるのは嬉しいけど、相手に油を注ぐのは止めてくれ！

「ここまで、彼女を穢すとは！君は彼女に何をしたんだ！」

「何もしてないよ！だから、早くどっか、行つてよ！」

くそ！このごろ人とは（ケティ、才人除く）口喧嘩しかしてないよ！

「僕の名誉を汚すのがそこまで、楽しいのかい！才人には負けたよ！ああ、彼は強かった！彼のことは認める！しかし！君の事は断じて認めない！男としても！メイジとしても！貴族としても！君の事は絶対に認めない！」

「お前に認められなくていいから！」

つか、才人おめでとう。貴族の友達ゲットじゃん。

「諸君！決闘だ！僕がこの『単一のルーラ』に我が手で制裁を下してやろう！」

そこまで、重大なこと！

そうして、決闘で治まり、野次は去っていった。

俺とケティと、どこから来た才人がその場に残つて。

「す、すみません・・・ついカツとなつてしまい・・・本当に申し訳ありません・・・」

「いいよ・・・勝てば問題がないんだ・・・」

「お、お前勝てるのかよ？魔法使えないんだろ？」

心配してくれるのか才人・・・お前つて奴は・・・優しいな・・・

「使えるよ・・・一つだけ・・・」

「一つって・・・お前相手は何種類も使っただぞ？勝てるのかよ？」

「勝ってみせるさ・・・勝たなきゃいけないんだ・・・」

「なんで、そこまで？」

「勝たないと、ケティがもっと悲しむだろう？」

と、言うのと沈黙が走る。そして、空気を読まずに・・・

「犬！ここにいたの！って、ルーラじゃないの！何してるのよ！」

「お前は、俺が何もしてなくても突っかかるのか・・・今は疲れてるんだ・・・話しかけるな・・・」

「わ、私に向かってそんな事言っているのかしら？ど、どうなるかわからないわよ？そっちの娘も？あんたのメイドも？分かった！？」

SIDE才人

「わ、私に向かってそんな事言っているのかしら？ど、どうなるかわからないわよ？そっちの娘も？」

コイツ！事情も知らないで！

けど、こんな思想巡らせている間に、ルーラがいるべき場所にルーラがいないで、ルイズがいるべき場所にルイズはいなくなっていた。探すと、ルイズが壁に押し付けられ、ルーラがルイズを壁に押し付けている。って、ルイズ足床についてないぞ！

ルーラの杖はルイズの喉元に・・・赤い刃を輝かせながら・・・

「二人に何かしてしろ。お前の命はないと思え。」
そして、まるで虫けらでも見るような目はずし、栗色の髪の子の方に歩み寄る

「さあ、ケティ。行こうか？送っていくよ。」

「は、はい……。では、さようなら、才人さん、ミス・ヴァリエール……」

と、言つて二人ともその場から消えていった。

残ったルイズは気絶している……

俺の目じゃ、追えなかった……。捕らえることもできなかった……。ルーラお前は何をしたんだ？

ルイズどうしよう……。運ぶか……。怒られそうだし……。後で、ルーラのこと訂正しておこう……。あいつそんな悪い奴じゃないし……。いい奴だ……

SIDE OUT

そして、夜は開け、次の日が来る。

だれも、予想もしていない結果を残すために。

ケティとルーラの約束はなくなったそうで……。 (分からない方は上のほうを見ればいい)

第6話　魔法はイメージなのですよ？（前書き）

いやあー、なんだか書いてて面白いと同時にSSを書く大変さが分かります．．．今回は主人公のオリジナル魔法です。しょぼいです．．．

第6話　魔法はイメージなのですよ？

「僕の名前は『青銅のギーシュ』！グラモン家の四男！そして、お前に敗北をもたらす者だ！」

「我が名は『単一のルーラ』ラーク家の長男。お前を夢から覚ます者。」

ただいま、生中継で『ヴェストリの広場』でございます。

さあ、これから始まる試合は、ルーラvsギーシュ！

さあ、どっちが勝ってもおかしくない！これは、おもしろい試合になりそうです！

第6話　魔法はイメージなのですよ？

SIDE才人

始まってしまった・・・俺は何もできなかった・・・止めることも、励ますことも・・・

俺は無力だった。力があっても、それは戦う力。俺は、何をすればよかったんだろう・・・

「なあ、ルイズ。止めなくていいのか？」

横に座って見物しているご主人様に聞いてみる。

「ふん！あんな屑負ければいいのよ！」

「この前は必死に俺のこと止めようとしたのに……」

「あああ、あれはアンタだからよ！あんな平民以下の生物どうなってもいいわ！」

「ルーラは平民じゃなくて、貴族だろ？」

「あんなのを貴族って言わないの！魔法を使えない時点で貴族は名乗れないわ！」

「使えてるじゃん……ブレイド……それに、それ言ったらお前だつて魔法使えてないし……」

「わ、私のは爆発してるじゃない！誰にも真似できないわ！ブレイドってコモン・スペルの一種なのよ！魔法って言わないわ！」

俺からしたら、あれも十分に魔法なんだけどな……

「ほら、始まるわよ！やつと、あの忌々しいルーラが裁かれるわ！」

「軽くすむといいんだけどな……がんばれよルーラ……」

俺にはここから、彼の無事を祈ることしかできなかった……

SIDE OUT

今僕は、ギーシュと対面している。どうやって、戦おうか……迷うところだな……どうせブレイドだけでも勝てるんだが……あ

れを使うか・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたんだねルーラ君？まさか、いまさら怖気づいて言葉すら発せないのかい？まあ、今ならここで僕に謝れば許してあげなくもないけどね？」

「ん？ああ、考え事をしていたんだ。すまないね。」

「いつまで、そのふざけた口を動かすことができるんだろうね！？」

「いつまでも、だな。君の攻撃は僕に当たりあえないからね。」

「そこまで、僕を侮辱するか・・・では、後悔するがいい！そして、光栄に思え、僕が自分の手をわずらってあげたことを！」
そして、決闘は始まった・・・

「出でよ！ワルキューレ！！」

ギーシュが杖を振り、地面から戦乙女『ワルキューレ』が生える。
魔法名『鍊金』。金属を作ることができる。

ギーシュのワルキューレは二つ名通り青銅でできている。

「なんだか、そんなこと言われると、こっちもかっこつけたくなるな・・・」

俺なんて、精精『プレート』しかいえない・・・ぬー、ここは・・・
・決めた！

「我が戒めをその身に表せ！ブレード！」

そして、杖の周りに赤みがあった、半透明の刃が現れる。なんだか、

意味不明だな・・・まあ、いいか・・・

「ふん！そんなちんけな刃、僕のワルキューレが砕いてあげよう！」
そして、ギーシュは一人のワルキューレを僕に突っ込ませる。

ギーシュは油断していた・・・相手が僕で。僕が『単一』で。ぼくが魔法を使えないと思っていた。
しかし、僕はこの魔法しか使えないからこそ、この魔法を極めた。

僕の刃はいとも簡単にワルキューレを真つ二つにした。バターをナイフで切るように。それはもうスッパリと・・・

「なっ！そんな、嘘だ！僕のワルキューレがお前如きに！なにをした！」

そういつて、ギーシュはまた6体のワルキューレを錬金して、僕に突っ込ませる。

さすがに、僕でも6体同時はできない。刃が一本の場合は・・・

「これで、君も終わりだ！ブレードしか使えない君に6体同時攻撃になすすべはない！才人じゃあるまいし！」

魔法とはイメージ。イメージができればなんでも、とは言わないがある程度のことはできる。

ブレイドの場合、イメージによって変えられるのは、切れ味（回転数）、質量（大きさ）それと形だ。

この中で一番大切なのが『形』になる。形によって、回転数の限界ができる。

形を変えると、そのぶん質量も変わる。

例えば、形を『壁』にすると、質量は大幅に増える（少なくともいいが、壁の役割はもてない）、そして回転数は皆無になる。

形を『剣』にすると（通常時）質量、回転数ともにバランスが取れる。

そして、形を『カタナ』にすると、質量が少なくなり、横からの衝撃に弱くなり脆い、反面、回転数はMAXに近くなる。

これらは、単体相手の場合や、防御の場合だ。

しかし、複数相手の場合は？

今のルーラでは、質量と形を上げ、それに回転数を加えることは困難とされ、切れ味が格段に衰えてします。

しかし、ブレイドとか元々鉄をも切れる刃だ、青銅などバターに等しい。

だから、ルーラは今回複数相手の戦法を使った。

想像するのは、蜘蛛の巣。すべての敵を落としいれ、喰らう。

蜘蛛が象徴する、嫉妬の思いを乗せ。彼は放つ。

「歪な論舞」

そして、ギーシュの放った、ワルキューレ6体はばらばらになり、踊り狂ったかのように崩れ落ちた。

操り人形の糸が切れたように・・・

沈黙が世界を支配する。

誰も、何も発しない。当のギーシュもあっけを取られている。

全員が何が起こったかわかっていない。
ルールにとって、普通のことだが、彼等には理解できない。

SIDE タバサ

見えなかった。彼が何をしたのか。
いや、彼は何もしなかったのかもしれない。
あの場所からただ、不可視の斬撃を放った？
しかし、彼は魔法が使えないはず・・・

「ね、ねえ、タバサ？彼がなにをしたか分かる？」

「・・・（フルフル）」

はつきし言ってこの場の誰も分かってないだろう・・・

「私も、彼があっさり負けるとは思ってたけど・・・あっさり勝つとも思ってたわ・・・弱い同士粘るか・・・」

私もそう思っていた。けど、結果として彼が魔法一つで打ち負かした。

興味が沸いてきた・・・

「なに、タバサ？彼のことじっと見ちゃって。気になるの？」

「気になる。」

「あんたがそこまではつきり言うなんて本当みたいね・・・」

「俺の勝ちだ、ギーシュ・ド・グラモン。ケティからは手を引いてもらうよ。」

沈黙を破ったのは彼だった。彼等は女のことで揉めていたのか・・・結果としては、決闘が見れた。ワルキューレの彼には感謝しなければ・・・

「み、認めないぞ！僕は負けてなんかない！どうせお前が何かしたんだろ！金で人を雇ったな！」

みつともない・・・自分の負けを認めれない人は屑だ。

「ギーシュみつともないわねえ！。ちょっとはいい男と思ってたけど・・・」

「みつともないぞギーシュ・ド・グラモン。自分の負けを認めろ！」

「ひ、卑怯だ！貴族の風上にも置けない！」

まったく、彼は芯から腐っているらしい・・・

数人が、ギーシュの周りに行き、彼を静め始める。

「ふん。自分の負けを認めないなんて。お前こそ貴族の風上に置けない。」

そう言っつて、彼はその場を立ち去ってしまった・・・

彼とは、後で話をしてみたい。

SIDE OUT

SIDE才人

ルーラは勝った。誰もが、予想しない形で。

結果はルーラの圧勝だった。俺のときみたいにギッシュを打ち負かしてしまった。

隣にいるルイズは俺が勝ったときみたいに、口が閉まらないくらい驚いている。

それはそうだ、今までバカにしていた相手がいとも簡単に勝ってしまったのだ。

「ルイズ、ルーラのところ行って来るわ。」

「ちょっと、犬！待ちなさいよ！私も行くわよ！」
と、言って怒鳴ってくる。

コイツの行動パターンは、怒鳴る、殴る、蹴るくらいしかないらしい。

けど、時々笑ってくれる。その笑顔が欲しくて、俺はがんばっているのかもしれない。

SIDE OUT

勝った。それはもう、圧勝だった。

これで、やっとケティの所にいける。

見回してみると、彼女はどこにもいない。

彼女の友達と思わしき女性たちも探しているらしい。

「あ、あの？ケティどこにいるか知りませんか？」
俺に尋ねてきた。

「ごめん、僕も知らないんだ・・・」
嘘です。実は知ってます。今の時間はいつも会うことになっている
約束の時間だ。

「そ、そうですね・・・では、失礼します。」
彼女等が去った後僕は一人で歩き出す。

いつも彼女と会っていた木陰のところへ。

「やあ、ケティ。今日は待っててくれたんだね？」
彼女の隣に座った。

「る、ルーラ様！け、決闘はどうしたんですか！？」

「もう、終わったよ？時間が掛かったただけだった。」

「か、勝ったんですか！？」

「そんなに意外なの！？そこまで、弱くないんだけだな・・・」

「だ、だってルーラ様の二つ名は・・・」

「単一だよ。けど、単一も意味が違う。ただ一つしか使えないけど、
ただ一つだけだからこそ、僕は強くなれたんだと思う。僕ってバラ
ンス取れないからさ・・・」

そういつて、彼女を撫でてあげる。すると、彼女は目を細めて僕の肩に頭を預けて、目を閉じ動きを止めた・・・
その時間が、何時間のようにも感じた。いつまでも続いて欲しいと願ってしまった。叶いもしない願いを願ってしまった。

そして、何時しか彼女は眠りについていた。

SIDE ケティの友達の一部

私たちがケティを探していると、自然と一つの場所に向かっていた。それは、ケティがルーラ様と会っていた木陰の場所だ。

ここにいたるまで、時間を食ってしまった。

もう、それは色々な場所を探しました。

教室、部屋、研究室、トイレ、タンスの中・・・・・・・・

けど、どこにもいませんでした。

そして、いざ木陰の場所に来てみると、ケティはどこにも見当たりません。

けど、木陰に一人の影が見えました。

近づいてみると、それはルーラ様でした。

「ルーラ様、こんなところで何をしているんですか？」

「しーっ」

彼は、私たちに静かにするように言いました。けど、なぜでしょう？

「ケティはどこですか？」

と小声で聞くと、ルーラ様は自分の横を指差した。そこには

「つて、ケティ！」

なんとケティがいたのです。

「しーっ！」

「ん・・・」

危ないところだった・・・

「やりますね、ルーラ様。ここまで、ケティを手なずけるなんて・・・」

「僕何もやってないんだけど・・・彼女が勝手に寝ちゃったんだよ・・・」

「それは、もつとすごいことです。」

二人を見ているとそれはまるで兄妹をみているようだった。

ルーラ様が優しいお兄様で、ケティがブラコンの妹。

絵になりますね・・・

SIDE OUT

SIDE 才人

俺たちが（ルイズは勝手についてくる）ルーラを探し始めて少し時間が経った。

結局あいつはどこに行っただろう？

「ねえ、あいつどこ行っただのよ？」

「お、俺が知るかよ！」

「じゃー、どこに歩いてるのよ！」

ああ、コイツうるせえー。なんで、俺こんなやつ好きになったんだよ！？

あ・・・あそこにいるかもな・・・と思いついたのがあいつと栗色の髪の少女がよく会っていた場所だった。
って、そろそろあの子の名前も覚えたほうがいいかな・・・？

「おし、こっちだ！」

「ちょっと、お主人様に命令なんてしていいと思ってるの！」
コイツはどっちなんだ！案内して欲しいのかよ！

そして、あの木陰のところに来ると、もうすでに数人の女生徒が集まっていた。

俺も近くにより

「よっ、ルーラ！元気か！」

と、少しは元気にしてやろうと思ったのに・・・

「「しーっ！」」

と、怒られました・・・

猫なんて引っ掻いて来るし・・・

痛いよ猫さん・・・

って、あの女の子がルーラの肩で寝てる！なんて、羨ましい！

それから、静かにしながらルイズが彼に尋ねはじめた。

「あんた、最後の魔法何よ？何あれ？まず、魔法？」

「あれは、『ブレイド』だよ」

まじで、あれブレイドなの！？

「そ、そんなはずないでしょ！ブレイドがあんなことできないわよ！」

「くくくっ！」「くくく」

やばいだろ、こんなに気持ちよさそうに寝ているケティ（今さっき知った）を起こすなんて・・・

やべえー、今「ん・・・」とか、行つて寝返りを打ちかけたぞ！？

「く、ごめん・・・」

今回は、ルイズが謝った・・・

「あれは、『ブレイド』の刃の形を変えて、網みみたいな形にして、刃を糸状にした物だ。糸が細いから見えないけど。その分、切れ味が落ちるけど青銅くらいなら大丈夫だったよ。」

「そ、そんなことできるなんて聞いたことないわよ。」

「それも当然だろ・・・誰も教えてない・・・」

「な、なんでアンタがそんなこと知ってるのよ？」

「ブレイドしか使えないからこそ、試行錯誤したんだ。」

コイツの苦勞がわかった気がする。大変なんだろう。俺みたいに、勝手に力がついたんじゃないやなくて・・・

そんな時、突然・・・

ガサッ

後ろのほうで何かが動いた・・・

S I D E O U T

後ろのほうで何かが動いた。それは確かなんだが、それに気付いてるのが俺と才人だけとは・・・
ルイズお前は馬鹿なのか・・・

俺は激しく動くわけにもいけないし・・・
頼んだ才人・・・と目で言ってみると
才人に通じたらしく。

「そこにいるのは誰だ？」

と、後ろに向かって言葉を放ってくれる。

「私」

そう言つて、出てきたのは

「タバサじゃないか？」

タバサだった・・・なぜ、彼女がこんなところに？

女子寮は反対側だし、図書館はもっと南のはずだ・・・

「なんで、こんなところに？」

「あなたの話を聞きに来た」

「ああ、お前もルイズみたいな口か・・・ああ、夜でいいか？」

「いい」

「じゃー、夜に女子寮の裏で。」

「わかった」

そういつて、彼女は帰つていった。

「いいのかよ、ケティがいながら？」

「別に、僕とケティはそういった関係じゃ・・・そうであつたとしても、彼女は僕の話の聞きないだけだろう？」

「そ、そうだな・・・（コイツ鈍感なのか？）」

「そ、そうですね（いえ、きっと分かってます）」

「ならいいか・・・」

「才人何がいいんだ？」

「なんでもねえよ」

「そうか？なら、いいけど・・・」

「ケティ、どうするか・・・」

「「「あ・・・」」」

「どうするか？」

「つて、おい才人その『ここはもう決まってるだろ』みたいな顔やめろ！」

「後は、頼んだわ。アンタが寝かしたんだから、あんたが責任取りなさいよ。」

「と、言つてルイズが立ち去る。」

「ルイズちよつと、待てよ」

「と、言つて主人について行く才人。」

「では、これで」

「と、蜘蛛の子を散らすように皆が去っていく・・・」

「俺を一人置いていくな！」

SIDEケティ

今日私は激しく後悔していました。

ギーシュ様とお付き合いしたこと、ギーシュ様に挑発的になってしまったこと。

そして、嬉しかった。ルーラ様が私を庇ってくれて。

けど、そのために決闘してしまっている。

そして、今も後悔している。そんな決闘のせいで（おかげで）今とても恥ずかしいです。

今さっきまで、私はルーラ様の肩で寝ていました。そして、なんだか何時起きていいのか分からなくなり、目は覚めているのですが・

まだ彼の肩によっかかっています。

けど、恥ずかしいのに・・・離れたくありません。彼の温もりが、とても優しく。私をあの時みたいに慰めてくれる。

今まであった悲しいこと全部を慰めてくれる・・・ずっと、彼と一緒にでありたい・・・

でも、それは無理なお願いだと思う。彼はどこかここにいて、どこかここにいない・・・

本当の自分を見せてくれない・・・そんな感覚を誘うのです・・・

そろそろ起きましようか・・・でも、ここで起きたらこの温もりを一生味わえない気がするんです。

そんな時に彼が、

「ケティ・・・僕はさ、どこかギーシュを憧れてたのかもしれない・・・」

彼が話し出した。私が聞いてないと思ってるのだと思います。

「あいつは、魔法が使えて、自分に自信があって・・・自分こそがすべてと思えて。本当にどうしようもない奴だったけど。いつも、和の中心にいてさ・・・俺とは真逆にいた・・・」

たしかに、ギーシュ様は自分に自信があったのでしよう。でなきや、あんなセリフいえません。

「一生掛かって、僕には届かない憧れだった・・・」

「けどね・・・」

「君に会って、気付いたよ。」

「僕は僕で、彼は彼。元々、届くはずがないんだ・・・」

「だから、僕は、僕として生きようって思えたんだ。」

「なにが、どう変わったかなんて自分でも分からない・・・もしかしたら、変わってなんてないかもしれない・・・でも、そう決めた。」

「なんだか、聞いてて照れくさいです。」

「そんな、ことを教えてくれた君が・・・僕は本当にまさか、このパターンは!？」

「好きだよ・・・」

彼の言葉が、そっと囁かれ・・・すぐに風に乗って消えてしまった。

これを聞けて、本当に眠っていて良かったと思う・・・
眠ってなかったらルーラ様から告白なんて絶対無かった。

「って、何言ってるんだろぅね僕は・・・ケティは寝てて、聞いているはずなのに・・・本当は聞いて欲しかったけど・・・僕にはまだそんな勇気がないよ・・・」

いえ、もう言っています・・・私起きてます！

「よし、じゃー、そろそろ帰るか・・・」

え、私はどうするんですか？

と思っていると突然の浮遊感を感じた。

彼が私をお姫様抱っこしたのです。

それでも、寝たふりです。こんな、ところで起きれません・・・

「よかった、起きなかったか・・・」

ですから、起きてます！

そして、彼は私を一年女子寮へと連れて行きました。

そして、廊下を歩いていると、友達の一人に会い、私の部屋へ連れて行き、ベッドに寝かせ、また、私を撫でて退出しました。

そして、退出したあとすぐに、友達数人が押し寄せてきて

「なにがあつたの！」

「ルーラ様があんなに神妙な顔つきしてたわよ！」

「ま、まさか一線を越えた！」

「そ、そんな事ないです！なにもしてません！」

「と、いうか・・・ケティ、あなた、ずっと起きてたでしょ・・・」

ギクッ

「本当に！」

「ちょっと、あんた羨ましいわね！」

「お姫様抱っこまで・・・」

と言う風に、彼女たちの妄想が膨れていきました。

SIDE OUT

俺は夕飯を食べ終わった後、タバサと約束した通り女子寮（この場合2年）の裏に行き、彼女を待とうと思ったら・・・
彼女はすでにいました。

「待った？」

「待ってない」

「そっか、よかった・・・」

「説明」

僕は彼女が苦手だ・・・会話が続かない・・・それに、どこかそ

よそしい・・・

「分かったよ・・・タバサは魔法はなんだと思ってる？」

「魔法は武器」

初めてこんな答えを聞いたよ・・・

「ああ・・・そういうのじゃなくて・・・なにが大切だと思う？」

「想いの強さ・・・信念」

「まあ、あながち間違ってるね・・・魔法で大切なのはイメージだ」

「イメージ？」

「そう、魔法は不確かなものだからね。イメージ次第でいくらでも変わっていく。」

「本当？」

「本当だよ。僕が今日使ったのを聞きたいんだろう？」

「そう」

「あれは、ただの『ブレイド』を強化したものだ。コモン・スペルだよ」

「本当？」

「本当だ。あれは、対複数用に作った技で、切れ味はあまりないけど、量を多くすれば結構広範囲をカバーできる・・・はず」

「そう」

わかってくれたのかな？

「なら、ウインディー・アイシクルを強化するのなら？」

「あの魔法か・・・あれなら・・・風・水の魔法だし・・・氷の矢の周りに風の層を一枚作っておいて、衝撃への耐性と貫通力の強化かな」

「どうやるの？」

「そう、イメージするだけだよ。今日使ったのは、蜘蛛の巣をイメージするし。その、イメージは個人個人で変わるから教えられないけど・・・こんな感じでいいかな？」

「うん・・・ありがとう」

と、言ってその場をそうそうと去っていった

「って・・・行っちゃったよ・・・まあ、良いか・・・俺も帰ろー」

そして、部屋に戻ると、鬼の形相のマリアにこっぴどく叱られ一日が終った・・・

散々な一日だったよ・・・

それにしても・・・ケティはかわいかったな・・・

第6話　魔法はイメージなのですよ？（後書き）

今回のオリジナル魔法『歪な論舞』は迷いました。まず技名を単純に『スパイダーズ・ウェブ』にするかどうかで悩みましたね。でも、迷った挙句、『歪な論舞』にしました。はい、中二発言全開かも知れませんが、お恥ずかしい・・・ちなみに、魔力消費量は壁『ウォール』が一番高く、『カタナ』が一番低いです。今回の『歪な論舞』は消費量は『剣』で形を変えただけです。切れ味は『剣』の半分くらい。

第7話〜デートだぜ〜（前書き）

今回は本編にちよつと関係する。会話分が多め・・・最後は中二全開・・・詩人なんて向いてなかった・・・ちなみに、ルーラとケティの身分はルーラのほうが大分低いと思ってください・・・そういうことで読んでください。戦闘描写はとても、苦手です。省けるだけ省いてると思うてください・・・すみません。分かりにくいかもしれませんが、おれから精進したいと思ってます。後、金銭感覚がまったく分かりません・・・なにこれ？見たいな感じです。すみません。

第7話〜デートだぜ！〜

あの、事件以来ケティは僕と目を合わせると赤くなり目をそらしてしまふ様になった・・・

ま、まさか、あの告白聞いたわけじゃないよな？寝てたんだし・・・
うん、俺の勘違いだ！

そう決め付けて、俺の一日が始まった。

第7話〜デートだぜ！〜

いやあ、今日も穏やかないい日だ。今日は虚無の日曜日。
いつもなら、ごろごろ一日中寝ているところなのだが・・・
今日は！今日はなんと！

ケティとお出かけです！

おういえあ！（Oh yeah!）

『ご主人嬉しそうだにや？』

「嬉しいに決まってるだろ？男だぜ僕は。お前だってメス猫にデイトに誘われたら嬉しいだろ？」

『うれしいにゃ！』

「そういつもんだ。」

『そうかにゃ。わかったにゃ。』

「お前も一緒に連れてって俺の目をしてもらっぜ。」

『初めてのお仕事にゃ！はりきるにゃ！』

そう、それは昨日のこと・・・

回想中~~~~

「あの、ルーラ様・・・」

なぜか、顔を赤らめているケティ（超かわいかった）がおずおずと話しかけてくる。

「ん？どうしたんだケティ」

「あの・・・その・・・えーとお・・・」

はつきりしないな・・・俺からも仕掛けてみるか・・・

「一緒に買い物でも行く？」

冗談三割、本気七割で言ってみたが・・・

「ルーラ様は人の心が読めるんですか？」

「あはは、そんなわけないだろ？」
彼女もこれが言いたかったらしい。

「じゃ、じゃーなんで・・・」

「ケティは言いたいことが顔にすぐ出るんだよ？」
はい、毎回ながら嘘です。そんな事ありません。ただのあてずっぽです。

「うう~~~~・・・」

と、拗ねたような子供みたいにかわいい声を上げる彼女がとても、
かわいいぜ！bb

「で、行く？だめだったら、別にいいけど・・・？」

「行きます！行かせてください！わ、私新しいお洋服が欲しくて・・・
る、ルーラ様に一番に見て欲しくて・・・だめですか？」
と、行つて弱涙目＋上目遣いのケティに俺が勝てるはずない・・・

「おっけー、じゃ明日居行こっか？僕もケティに何か買ってあげたいし」

「本当ですか！？じゃー・・・私もルーラ様に何か買って上げますね？」

「そうしてくれると、嬉しいな？」
と、約束をした。

回想終了~~~~~

そんなこんなで、俺は約束通り校門の前で彼女を待つ。
ここは、普通は女性を待たせるのはいけないな。

「あれ？アンタ何してるのよ？」

そんなところにルイズが登場した。いらないのにな、コイツ・・・

「あ？僕は今人待ってるの。」

「アンタが待つ人なんてたいした人じゃなさそうね。ふん。」

「あのな。何回言えば分かる？ケティを侮辱したら許さないぜ？」
俺は今言い気分なんだ。今はそこまで怒らないけど・・・

「で、お前は何してるの？」

「今から馬を借りに行くのよ。」

「遅くね？もつと早く借りとけよ・・・」

「急に決まったことなんだからしょうがないでしょ！」

ああ、ああ、コイツ朝っぱらからうるさいな・・・

「って、なに怒ってるんだよルイズ？って、ルーラじゃん・・・ルイズはルーラが居ると怒るってしまうのか・・・」

「なんで僕が原因なんだよ・・・」
と、色々と講義していると・・・

「あ、ルーラ様！待たせちゃいましたか？」
と、ようやくケティ登場！

「全然待つてないよ？今ルイズたちと話してたところだよ。」

「なんて、紳士フェイス作ってるのよあんた！」

「もう、台無しじゃないか！」

「ルーラお前！ま、まま、ま」

「ママ？」

「まさか、ケティとデートなのかよ！?!?!?!」
声が大きいよ才人！

「才人声が大きい！」

「才人さん!!」

ざわざわ

ざわざわ

『ルーラがケティとデート!?!』

『ようやく進展が!』

『あいつら見てるとむずがゆいんだよ!?!』

『羨ましい！死にさらせルーラ！』

と、外野がああああ！やべえー！これ以上は、無理だ！

「け、ケティ！早く行こう！」

「は、ひゃい！」

噛んでるんだよ、ちくしょう！かわいすぎだ！

そして、僕は事前に借りておいた馬に跨り、彼女に手をのばす。

「ほら。」

そして、彼女は僕の手を掴み馬と一緒に跨る。

そして、僕の後ろに座り、僕の胴に手を回し抱きつく。

この時点でルーラのHPはピンチ！

そして、僕たちは学院を駆け出し始めた。

学院から出て2時間くらい経った。そして、今少しピンチである・

・
乗り始めて最初の頃は別段話題に困っていなかったのだが・

今、話をしていない・・・なにか気まずい・・・まずい・

気まずいのに・・・そうなのに・

彼女の温もりを感じていると安心してしまっ自分がそこにいた。

彼女の匂いが自分を包んでいた気がした。

彼女の微かな胸の膨らみが背中当たっている・

彼女が揺れるたびに自分にもその振動が伝ってくる・

緊張してしまう・・・ここまで密着したのは初めてだった・・・
この前は肩で寝ていたが、そのときはいろんな人と話してたし・・・
しかし、後ろを見るわけにもいかない・・・後ろを見た瞬間馬から
落ちる気がする
後ろが見たい一心であるが、そうするわけにもいかない・・・
生殺しだ！

まず、なんで馬は一頭で良いと言ったのはケティだった。
なぜだ！まさか、この生殺しを計画していたのか！恐ろしい！
いや、ケティに限ってそれはないだろう・・・

SIDEケティ

今私はルーラ様と馬に乗っています。
なぜ、一緒に乗っているかというと、この前友達に『ルーラ様と一
緒に遠出をする場合は馬を一頭にしておいた方がいい』と言われた
からだ。

けど、まさか、こんなに気まづくなるとは思ってなかったんです。

それにしても、今も彼の温もりで安心している私がいる。

俺の背中はこのように大きく、頼りのあるものだったんです。

最初からそう・・・最初だって、私を慰めてくれた（自分ではそう
言っていないが）、私のために決闘もしてくれた。

私は、この背中に頼ってばかりいたんですね・・・

そして、これから頼っていいんですよね？ルーラ様・・・

けど、私も少しは頼ってくださいね？

SIDE OUT

やっこの思いで（精神的意味で）王都トリステインに着いた。

彼女をそつと馬から下ろすと、目が合ってしまった・・・

恥ずかしい・・・ケティも恥ずかしいのか、頬を染めてさつさと降りてしまう。

うう・・・どうすればいいんだ・・・

自分も馬から降りる

「ケティ、大丈夫かい？ 疲れたりしては？」

「だ、大丈夫です・・・」

と、言っているが、明らかに顔が真っ赤です。

そんなんだと、俺も困ると思ってすこしきよろきよろしていたが・・・

・

そうなんです、視線が行ってしまいます。彼女の胸に・・・

彼女の胸に視線が行ってします。がんばって、離そうとするが・・・

抗えない・・・

そんな俺に救いの手が！

ヒヒーン！

馬が鳴いた！！

サックス馬！ 君は最高だ！

「ああ、ごめんごめん。今馬小屋に預けてあげるから。」

「そうですね。ごめんなさい馬さん。」

ヒーン……

コイツ分かってやがる！

そういつて、馬を馬小屋に預けて城下町に出る。

「ケティの服を買ったっけね？」

「は、はい。行くところはもう決まっていますんで、早く行きましょう。」

「ああ。」

そんな感じでケティに案内を頼み、色々な洋服店を回っていく。

その中で色々とハプニングがあった……

下着コーナーとか……

どこに行っても恋人と間違えられるし……

でも、いい事もあった。

どの服を着てもケティはかわいかったし、そんな彼女を見て良かったと思う。

そして、そんな彼女はずっと笑顔だった。

そして、最後のイベントと思われるプレゼント交換の品を探している最中である。

そんな時に

「よお、その貴族の坊ちゃんとその彼女さん」

「はい？」

「こんなもの買ってかないかね？」

と、行つて露天販売のおつちゃんたちが俺たちに売りつけようとしているのは、一対の指輪と髪飾り。

両方とも翼のデザインがされている。

僕はそのデザインに惹かれるとともにその意味も知っていた。

「じゃー、それにしよう。」

「はい、毎度！まけておくよ！」

そして、僕は金を5ドニエずつ合計1スウ与える。

そして、受け取った髪飾りをケティに付けてあげる。

「ほら、ケティ。似合ってるよ。」

「そ、そうですか？」

「ほづ、こりゃ別嬪さんじゃないか！」

「だろ？ケティが別嬪さんじゃなけりゃだれが別嬪なんだよ？」

「いやはや、このごろの貴族様は別嬪さんばかりでさあ」

「その言い方だと今さつきも会ったみたいない方だな？」

「へえ、今さつき珍しい桃色の髪の少女に会いました。」
ルイズか・・・

「そっか。ありがとうねおっちゃん。じゃな
そう言ってそこから去る。」

「ルーラ様は指輪を付けないんですか？」

「ん？付けて欲しいのかい？」

「で、できれば・・・折角お揃いなので・・・」

「わかったよ」

そして、指輪を指にはめる。

そして、我ながら問題発言をしたと思う・・・

「いつか、この指輪、薬指にはめるのかな？」

「へ？」

彼女の声はまぬけだった。

「え・・・あの・・・まだそういったことは考えてもなかったし・・・
・あの・・・でも、ルーラ様とだったら喜んで・・・」

最後のほうは全然聞き取れなかった・・・
それにしても、このときは彼女がどういった風に受け止めていたのかは知らなかった。

後に、ギーシュに教えてもらいました。

「そ、そうだ！ま、まだ私からプレゼントしてませんね？」

「そうだね。なにを買ってくれるのかな？」

「うう・・・なににしましょう・・・？」

「僕はケティからの物だったら何でも嬉しいよ?」

「そういつてもらえると嬉しいんですけど・・・ちゃんと選びたいです・・・」

「そうだね。ゆっくり選んでいいよ?」

「はい」

そう言つて、彼女は露天販売を物色していく。

「うーん、これもいい・・・けど、これも・・・」
そして、30分くらい悩んだ末に・・・

「これにします!」

と、言つて勝つたのがこれ。

王冠のデザインのイヤリングと剣のデザインのイヤリング。

それを付けてもらおうとしたときだった・・・不運だったんだろう・・・

うをぁー！！！！

と、人が吹っ飛んできた・・・

その人物は、なかなか筋肉質で、たぶん傭兵の類だ。

そんな彼を僕はケティを抱えちゃんとよけました。

そして、吹っ飛んできた方向を見ると・・・そこにいたのは才人で

した。

たしかに、才人はここに来るはずだったが・・・それがどう人を吹っ飛ばすのにつながる・・・

SIDE 才人

やべえ、ルイズに折角買ってもらった剣デルフルインガーを買ってもらってウキウキしてたら、不注意で人にぶつかってしまった・・・

それで、なにかルイズにけちを付け始めるからちよつと喧嘩売ったら、見事に買った・・・

そして、次に剣にいちやもん付けるから切れて、そいつを吹っ飛ばしてしまった・・・

しかし、吹っ飛ばした方向には人がいた！やべえ！よけてくれ！と、思ったらそこにはもう人はいない・・・吹っ飛んだ男以外は・・・

って、ルーラとケティじゃん！やっぱし、デートか！デートなのか！

SIDE OUT

「才人じゃないか？何してるんだ？」

「いや、ちよつと喧嘩になって・・・」

「喧嘩の度を越えてるぞ？」

「う、ごめん・・・」

「はっ！ざまあ、みなさい！平民どもめ！私の使い魔に勝とうなんて100年どころか1000年はやいのよ！ブリミル様の時代に戻って修行し直してから来なさいよ！」

つて、おおい！！ルイズ挑発するな！この流れだと、俺まで

「その兄ちゃんもぐるかよ・・・」
ほらぁー！！！！

つて、なんか傭兵増えてる！今のルイズの発言のせいだろ！！
巻き込まれた！

「くそっ・・・ケティ、下がってて。おっちゃんこのこの事見とい
てくれないか？頼む、この通りだ。」

そういつて俺は平民のおっちゃんに頭を下げる。周りは驚いている。

「そ、そんな恐れ多いです！普通にしますんで！頭を上げてくださ
い！」

「ああ、ありがとう・・・では、お前ら、今からなら相手してあげ
るよ？」

「俺が最初だ！」

そういつて、大乱闘が始まった・・・

それから、何人も何人も薙ぎ倒し、切り倒し（死なない程度）。

最後の数人になると。

「坊主！コイツが人質だ！」

と、ケティの喉元にナイフを突きつけている男がいる。

「ケティ！お前！彼女を放せ！」

よこでは、おっちゃんは『ごめん』と言わんばかりに頭を下げまくっている。彼のせいではない・・・一般人が傭兵に勝とうとするのと自体が無理なのだ・・・

そっちに気を取られている俺は、俺に向かってくる敵に反応を遅れた。

そして、吹っ飛ばされて、杖を奪われた・・・くそ・・・

「へっ！これで、お前はもう何もできない！」

「この娘どうするか？いい女だし、このままいただくか？」

「ルーラ様！」

「ケティ！待ってる・・・今行く・・・」

「杖のない貴族なんて相手じゃないんだよ！」

「才人！その剣貸せ！早く」

「オウ！」

そして、才人が^{デルフリンガー}剣を投げる。

「相棒、俺の投げるんじゃないやねえー！」

インテリジェンス・ソードかよ・・・

「すまない・・・今だけ借りるぞ！」

「オウ！つて、アンタなかなかの使い手じゃないか？心もいい感じに震えまくっててるしよ。」

意味不明なことを言う剣だな・・・

「はっ！貴族に剣なんて使えるかよ！」

と、言つて俺に突っ込んでくる傭兵一人。

「なめるな！俺は『ブレイド』しか使えないんだよ！」

そう、俺は剣は使える。というか、いつも剣を使っている。

「なっ！」

そして、俺は一人を切り倒すと、次、次と傭兵が来る。

一人一人を切り倒していく。峰打ちで胴を払い、首に当て。

そして、最後の二人・・・

「おい！相棒その人質もつと役立つように使えよ！」

「わかった！へへっ！悪く思ふなよお嬢ちゃん！おい、動くな！こいつがどうなつてもいいのか！」

「くっ！」

ケティがあの状態じゃ何もできない・・・

「へっ！だから、女がいると男が廃れるんだよ！女はやるためだけにいるんだ！」

「違う！そんな、はずない！お前らは間違ってる！」

「まちがってないね！現に今お前はあの嬢ちゃんによって抑制されてる！」

「くそっ！」

くそっ、俺にもっと力があれば・・・もっと力が・・・

そして、俺は感情に任せ相手に剣を振るう

「くそ！この坊主つよい！おい、相棒！もっと、何かやれ！」

「分かったぜ！」

そういつて、彼がケティの喉もとのナイフを微かに動かす・・・

深紅のし雫が彼女の喉を走る・・・

そのとき、何かが切れた・・・

知らぬ間に俺は駆けていた・・・

「くっくっくっく」

傭兵二人＋デルフです。

俺は自分でも知らずに、もうケティの目の前にいた。

そして、自分でも知らずに一人目の傭兵を吹き飛ばし、今まさに2

人目を殴り飛ばした・・・

どうなっているんだ・・・

そして、騒ぎが治まる・・・

結果、傭兵（30人弱）は平民一人＋貴族一人に負けてしまった・・・

「ケティ・・・大丈夫かい？」

「う・・・ヒック・・・グス・・・」

「ケティ・・・・・・ごめん・・・」

僕は彼女にすまなかった・・・自分にもっと力さえあれば・・・

「そ・・・そんな・・・ヒック・・・ルーラ様が・・・謝ることじや・・・ないです」

「違うよ・・・僕が悪かった・・・本当にごめん」

「謝らないでください！」

「け、ケティ？」

「なんで、ルーラ様は私に謝ってばかりなんですか！？なんで、私しか感謝しないんですか！？」

「そ、それは・・・」

「私が年下だからですか！？違いますよね！？なら、なんでです！」

「分からないよ・・・ただ、僕には人に感謝する資格がない気がする・・・だけだ・・・」

「そんな資格ありません！兄弟に資格なんて要らないように！感謝

するのに資格なんてないんです！」

「だから……私に感謝してください……おねがいです……そうしないと……私が救われません……」

ケティ……そこまで僕のことを？

「わかった……じゃー、ケティ、今さっきのイヤリングを付けてくれないかな？」

「べ、別にいいですけど……」

そして、彼女は僕に近づき、僕の左耳に剣のデザインのイヤリングを付け、自分には王冠のイヤリングをつける。

「それじゃー、ケティ……」

「はい……」

待ちに待った瞬間らしい……つか、周りの奴等いるんだけど……そいつらもなんか『ゴクリ』とかいつてるんだが……

「今まで……本当にありがとう。そして、これからよろしくな。」

そして、俺は彼女の唇に自分の唇を宛行う（あてがう）。自分に足りなかった何かが補われるような感覚……今までに一番彼女の温もりを感じる……一段と心臓が跳ね上がる……一生放したくなる……その一瞬は何秒にも感じられ……しかし、それは一瞬であつた……唇を離すと……

「あ……」

と、少し名残惜しそうにケティが声を出す。

「これで、おあいこかな？」

「そ、そうですね・・・はい、そうです！」

こつちもかなり、かなーり！恥かしかったです。けど、なんか衝動に駆られました・・・

そして、俺たちの初めてのデートはキスで締めくくられた・・・
周りからの拍手もあつたが・・・

SIDE才人

ルーラとケティがキスをしている・・・

な、なんて羨ますいー！ー！ー！！

お、俺もルイズと！ー！いつか！

「な、なあ、ルイズ？」

「しないわよ？」

ぐはっ！なぜだ！見破られた！？

「そんなんじゃないよ！あのさ、ルーラとケティがしてるアクセサリーなんだけど。」

「ああ、あれ？」

そう、あのアクセサリーになにか意味があるのだと俺は感じた。

「あれはね、ちゃんと意味があるの・・・」

「どんな？」

「しかも、ちゃんと組み合わせがあつてのがすごいのよ……」

「組み合わせ？」

「そう！まず、あの王冠のイヤリングは『王』を表すわ。ケティの場合王女か、女王。そして、剣のイヤリングは『騎士』を表すの。」

「へえ……それで？」

「翼の髪飾りと、指輪は、『自由』の象徴。つまり、その二つを組み合わせると……」

「組み合わせると？」

「それくらい分かりなさいよ！」

「は！おい！教えるよ！おいってば！」

「もう、いい！」

「なんなんだよ！この貴族は！」

SIDE OUT

SIDENOBODY

それは、夢、はるか昔からの……

騎士に恋をした王女・・・
王女に恋をした騎士・・・
許されない恋があつた・・・
二人は激しく願つた・・・
自由が欲しいと・・・

しかし、その二人の願いはどこか儚く・・・
すぐに、砕かれてしまつた・・・

身分の違う二人の仲は裂かれた。
二人はこの世を呪つた・・・自由なんてないのだと・・・

しかし、ルーラは願つた・・・
例え、自分と彼女の身分が違えど・・・
自分の手で、自由を勝ち取ってみると・・・
身分の差すらも取り壊して・・・
その王女を救つてみせると・・・

第7話くデートだぜーく（後書き）

キスシーンなんて、初めてでした・・・

最後の詩っぽいものは気にしないでください・・・

駄文なんで理解に難があるとおもいまして、最後に補足説明みたいな感じで・・・

第8話　俺の心、そしてフーケ・・・（前書き）

いやぁー。作者は海外でインターナショナルスクールなんで今夏休み真っ最中です。でも、明日から日本に行き、PCがない状態に！もしかしたら、日本でも新しいPCで更新するかもです。悪ければ1ヶ月のストップがあるかも・・・それでも、読んでくださるとうれしいです。

第8話　俺の心、そしてフーケ・・・

数時間前俺はケティを助ける一心で駆けた・・・
自分でも知らず・・・自分でも信じられないくらい早く・・・
人が見えないくらいの速度で・・・

でも、今はそれに驚いた・・・

その速さにじゃなく・・・その行為に。

僕も人のために怒り、人のために行動できる人間だったのだと。

第8話　俺の心、そしてフーケ・・・

デルフは言った・・・

『オウ！って、アンタなかなかの使い手じゃないか？心もいい感じに震えまくってるしょ。』

心の振るえ・・・気になる・・・

そして、その一心で俺は自分の部屋を後にした。

ルイズの部屋

今はルイズの部屋のドアの前に立っているんだが・・・

中がうるさい・・・異様にうるさい・・・
何事だよ？まさか、女子寮でこれが普通？
俺の常識を返せ！

そして、俺がドアノブに手をかけ、開けようとした瞬間
ドアが開いた・・・
その先にはタバサがいた。

「こんばんわ」

「・・・・・・・・・・こんばんわ、タバサ」
あれえ？なんで分かったのかな？

「気配」

お前は俺の心が読めるのか！？

「読める」

「ええ！」

「嘘・・・」

嘘かよ！？

「びつくりした・・・」

つて、周りの人たちなに？見せ物じゃねえよ！

「タバサと普通に話してる・・・」

才人、それはタバサに失礼じゃないか？

「アンタタバサと面識あったの？」

ルイズ、それは俺を侮辱してるな？俺の人脈はそこまで浅くねえよ！たぶん・・・きつと・・・

「ダーリン以外は興味ないわ」

どうでもいいよそんなの！つか、ダーリンって！？キュルケに遂に一人の男性が！？

「ダーリンって？」

「ダーリンはダーリンよ？」

「会話になってない・・・」

「ああ、たぶん俺のことだ・・・」
「なっ！才人だと！？」

「才人・・・君は男子の10人くらいを敵に回したのか・・・僕でもさすがにそれは助けられないよ・・・」

「なっ！そんなに深刻な問題！？」

「貴族つてのはプライドが高く根に持つタイプが多いんだ・・・自分の女だと思つてた奴が取られたら怒るよ・・・特にトリステインの貴族は・・・」

「ちょっと、何よその『トリステインの貴族は』つての！？」

「その通りだと思うわよ？ミスタ・ルーラはよく分かっているしやるのね？」

「その言葉遣いやめてくれない？それと、それくらい普通だと思うんだよね？俺貴族やめたくなってきた・・・」

「あら、それならゲルマニアで貴族やれば？お金さえあれば大丈夫よ？」

「だから、ゲルマニアは野蛮って言われるのよ！」

「由緒正しき貴族だけが貴族って言ってるトリステインはそのおかげで衰退してるけどね。」
と、色々と講義していると

「あのおゝ？で、ルーラは何をしに来たんだ？」
と、才人が助けてくれました・・・ありがとう、才人・・・助けてあげないけど・・・

「ああ、お前のデルフリンガーに用があるんだ」

「デルフに？」
そう言つて、デルフを「ほい」と言つて投げてる。

「相棒！だから、俺は投げるものじゃねえ！」

「ごめんごめん」

「で、坊主。俺様になんの用だ？」

「お前が言っていた『心の振るえ』とはなんだ？」

「その通りだ坊主。心の動きのこつた。怒り、悲しみ、嫉妬なんで

も良い。心が動く感情なら何でも良い。」

「そうか・・・なら、最後のあれは、お前がやったのか？」

「なはずないだろ？俺様もびつくりだったぜ？普通の人間に出せる速さじゃない・・・」

「じゃー、なんだったんだろう・・・」

「さあな・・・それにしても、坊主おもしれえ体してるな？なんだそれ？」

「体？なんのことだ？」

「体？知らないぜ、そんなこと？」

「まあ、知らないんならそれでいいや。」

「おい、そこまで言つといておあずけなの？」

「そんなこんなで、その後ルイズとキュルケが才人の使う剣についても始めた・・・」

「俺はデルフの方がいいと思うけどな・・・」

「おう、坊主分かってるじゃねえか」

「アンタの意見なんて聞いてないのよ！」

「私の剣がだめだって言うの！？」

「え・・・あ・・・」

こいつら、うるせえー・・・

そして、もめごとの收拾として

才人がロープで吊るされ、魔法でそのロープを切ったほうが勝ちらしい・・・

才人かわいそーだな。非常にかわいそーだ。同情しかねない・・・

少し後のこと・・・

なんだか、俺たちの目の前にでかいゴーレムがいます・・・

ルイズが爆破した壁を殴って突き破り、その腕をつたって、人が中に入って出て行きました。

って、あそこ宝物庫じゃん！どうすんだよ！くそっ！

「タバサ！シルフィードで才人とルイズを空に運んでくれ！ルイズお前は空から爆撃！キュルケお前はしたから炎で牽制頼む！」

「なんで、アンタが仕切ってるのよ！」

言うこと聞いてくれよ！

「分かった」

タバサ、君は何て良い子なんだ！

そういつて、タバサはルイズの服の襟を掴み、才人に『レビテーシヨン』をかけ、飛び立つ。

「ちょっと、不本意だけど、今は言うこと聞いてあげるわ。」

「ありがとう、キュルケ」

「で、アンタはなにをするのよ？まさか、見てるだけ？」

「俺はゴーレムの上にいる人間のところへ行ってくる」

「どうやってよ？あんな高いところ『フライ』なしじゃいけないわよ？」

「まあ、見てろって」

俺には秘策があった。高いところに行くことができる。

俺は短くブレイドを詠唱し、形を変え始める。

ロープのように細く、長く。先端を尖らせ。

その先端をゴーレムの肩あたりに刺し、形を元の剣に戻していく。そうすると、どうだろう。杖がひっぱられ、自分まで浮くのだ。そうして、易々とゴーレムの肩まで登り術者と対面する。

「これで終わりだ！誰だか知らないけど！」

「私は土くれのフーケだよ！けど、こんなところでは終れないわ！」
ちっ、やはり、そうか・・・ゴーレム見た時点で分かってたけど・・・

けど、さすがは盗賊。身のこなしだけで、僕のブレイドを避けるとは・・・普通のメイジとは一味違う。

「顔を隠して！素顔を見せろよ！」

「嫌だね！それじゃ、商売できないだろ！」

と、怒鳴りあいながら僕が切りかかり、フーケがそれを避ける。この繰り返しだった。

しかし、キュルケやルイズのおかげでゴーレムが一度激しく揺れ、フーケのフードが取れる。

そこに見えた顔は・・・

「ミス・ロングビル？」

ミス・ロングビルであった。学院長の秘書だ。

「見られたんならしょうがない！恨むなよ少年！」

そして、彼女は固まっている僕を蹴り飛ばし、僕はゴーレムから落ちる。

当然、さっきのロープで落下を阻止することはできた。

しかし、俺は今パニックに陥っていた。フーケがミス・ロングビルで、ミス・ロングビルがフーケで・・・

「うわぁー！！！」

俺は真つ逆さまに落ちていった。

S I D E タバサ

彼からの指示に従ったわけは、それが一番いい選択だったからだ。今戦闘力未知数の使い魔と役に立たないメイジは私が空に持っている、空からの援護射撃。

下はキュルケの炎による牽制、そして、彼が犯人に接近。一番分かりやすく、役割分担が楽だ。

しかし、その作戦の要の彼がフーケに突き飛ばされ地面に急降下している。

あの高さから落ちたら間違いなく死ぬ。

間に合って・・・彼を今死なすわけにはいかない気がする。

まだ、彼は何かを知っている・・・知るだろう・・・

だから、間に合って。

私は唱えた『レビテーション』。

彼が落ちる速度が下がった、しかし、高さが足りなかった・・・減速した次の瞬間・・・彼は頭から地に落ちてしまった。

SIDE OUT

SIDE 才人

魔法ってすげえ・・・あんなにでかい石の人形ができるなんて・・・しかも、残ったのは土だけ・・・卑怯だろ！

そして、もう一つ驚いたことは・・・ルーラだ・・・

ルーラが術者（フーケと言うらしい）にゴーレムから突き落とされ25メートル（才人内だとメートル）落ちたことだ。

しかも、頭ら落ちたらしく今も意識不明のまま保健室に連れてかれた。

この事件はまだ、生徒には言われていない。

明日の朝公開するらしい。まず、最初にケティに言ったほうがいいと思うんだけど・・・

「なあ、ルイズ？」

「なによ？」

「なんか不機嫌だな？なにかあったか？」

「なにかあったか！？あったじゃない！？なんで私は空から安全に援護爆撃でツエルプストーが牽制なの！？？」

「それは、適材適所だろ？それでさ、ルーラのことなんだけど・・・」

「どうしたのよ？」

「ケティに言わなくていいのかな・・・」

「まだ、言わない方がいいわ・・・」

「なんでだよ？言ったほうがいいだろ？」

「目が覚めて、案外ケロっとしてたらそれでいいし・・・一生目覚めないかもしれないわ・・・」

「不吉な事言っなよ・・・」

「なんでも、ありえるのよ・・・」
「そうかもな・・・」

「・・・・・・・・」
無事だといいな・・・

次の日

俺達、ルイズ、俺、タバサ、キュルケはまず、朝一に保健室に寄っていった。

ルーラのお見舞いと言うか・・・とにかく、様子を見に来た。

「「「お邪魔します」「」」

「あら、いらつしゃい」

保健室つきの先生だろうか？

「で、ルーラの様子は？」

単刀直入に挨拶なんていらぬ。とにかく、ルーラだ。

「今はもう、水の流れも穏やかになって起こそうと思えば起こせるんだけど・・・と、いうか今さっき起きたんだけど・・・」

「なにかあつたんですか？」

「あの・・・とっても言いづらいんだけど・・・彼・・・」

「記憶を失ってるわ・・・」

SIDE OUT

SIDE タバサ

今なんて？

「記憶がない？」

「ええ、残念だけど・・・自分の名前すら忘れてたわ・・・そのあとすぐ眠らせたけど・・・もしかしたら、一時的にショック状態で記憶を失ったのかもしれないから・・・」

「本当？」

「ええ、本当」

「今から会える？」

「会えるけど・・・やめたほうが・・・」

「会っ」

強引だけど、彼の知識はまだ必要。

「ずいぶん強引なのねタバサ。そんなに彼のこと気に入っちゃった。」

「うん」

「本当に気に入ったのね。けど、彼もう相手がいるわよ？」

「それでも、かまわない」

今はとにかく会えればいい・・・

「じゃー、こっちに来て頂戴。会わせてあげるから。」

そして、私たちは一つのベッドに近づいていった。

そして、先生がそのカーテンを開くと、外傷一つ見えない彼が寝ていた。

「傷は？」

「傷は直せたわ、でも・・・」

「そう」

そして、私は彼に近づいて

「起きて」

と、彼に話しかける。

「ん・・・」

彼が目を少しづつ開ける

「ちょっとタバサそれは強引過ぎない？」

「これぐらいしないと起きない」

そして、彼が上体を起こし壁に寄りかかり

「どなたですか？」

と、聞いてくる。それは、何も知らない子供のような無垢な目で。

「本当に覚えてない？」

「だから、どなたですか？」

「覚えてないみたいね。」

もう少しことの重要性を感じて欲しい・・・

「まじかよ・・・」

『まじ』とはなんだろう？後で聞こう。

「まさかね・・・」

そこまで、残念そうにしてない・・・薄情？

「本当に残念だけど・・・」

「先生のせいじゃない」

「ありがとう。ミス・タバサ・・・」

「だから、なんなんですか、あなたたちは？
しょうがない・・・」

「私たちはあなたの学友。」

「本当ですか？」

「本当。思い出してみて？」

「思い出す・・・」

彼が考え始めた。思い出せば、それでいいが、無理だった。

「すみません・・・なんにも思い出せません・・・」

「そう、なら良い。思い出す努力をするだけ。」

「はい・・・」

それから、彼に説明を始めた。

彼が、ルーラ・ルイ・ラクで、ギーシュを負かしたこと。

魔法が使えず、ブレイドしか使えないこと。

貴族というもの。私たちのこと。

そして、フーケのこと。フーケによって突き落とされ記憶を失ったこと。

説明が終ると。

「そうですか・・・」

と、なにか他人事のように言っている。まあ、今は他人かもしれない・・・

そして、

「で、このアクセサリーはなんなんでしょう？」

と、聞いてきた。私は知らない。ルイズのほうを向くと。彼女は知っているらしい。

「それは、あなたとケティがおそろいで付けてるアクセサリよ。昨日買ったばかりなんだけど・・・」

ルイズが説明してくれた。そうだったのか・・・

「ケティというと？」

「あなたの彼女よ」

「僕に彼女が？」

「ええ、それはもうラブラブだったわよ？昨日キスもしてたし」

「・・・・・・」

彼が赤くなっている。恥ずかしいのだろう・・・
この後は、話が続きなくなり先生によつて、打ち切られた。
なんでも、学院長が呼んでるとか、なんとか・・・

「彼は？」

「ルーラ君も少したったら行くわ」

「分かりました」

そう言つて、私たちは退出した。

SIDE OUT

今朝起きたとき、何がなんだか分からなかった。

しらない天井、見覚えのない手、意識が薄い頭・・・
しらずと、呻いていた

「う・・・」

すると、一人の女性が現れた

「起きたのね、ミスタ・ルーラ」

「ルーラ？誰ですかそれ？」

何を言っているのだろう？

そういえば、僕は誰だろう？

ここはどこ？

「まさか、記憶が・・・！」

「ちょっと、記憶って！」

「仕方ありません・・・『スリープ・クラウド』」

そして、僕の意識は刈り取られた

次起きると、そこには蒼い髪の少女とその取り巻きがいた。

そして、その人たちに僕と言う人を教えられ、記憶のない理由も教えられた。魔法が一つしか使えないことも。

一番衝撃的だったのが、僕の彼女だった。ケティと言う名前らしい。しかも、昨日アクセサリーを買って、しかもキスもしたらしい・・・
恥ずかしい。

それから、その人たちが誰かに呼ばれ退出していった。

そして、僕も先生にいくつかの説明を受けた。
貴族を侮辱しないこと。

今まで自分が起こしたいざこざでなにか起きたときの対処法。
ギーシュが来たら学院長に呼ばれていると言えればいい。
ケティが来たら・・・正直に言うべきであると。

そして、僕もタバサたちを追って学院長室に向かった。

学院の廊下

学院長室の場所は先生に教えてもらっていた。

そこに、俺はせつせと足を運んでいたのだが・・・

これは、たぶん神様のいたずらだったのだろう・・・

途中でケティを遭遇した・・・

「る、ルーラ様！だ、大丈夫ですか？昨日フーケと交戦したと聞いたんですけど・・・って、ルーラ様？」

僕は今、あのイヤリングと指輪をしていない・・・それが、せめての昨日までの僕との決別。

「君がケティかい？」

「る、ルーラ様、なにを言ってるんですか？」

「本当にすまないと思っている。けど・・・」

本当にすまない・・・けど、言わないときつと君はもっと傷つくよ。
・
・

「僕はもう昨日までの僕じゃなくなってしまったんだ・・・」

「ど、どという意味ですか!？」

「だから、僕にこれを着ける資格はないよ・・・だから、君に返すことにする」

と、言っただけの手に強引にアクセサリを握らせ僕はその後にする。

突き当りを過ぎたところで

「本当にすまない・・・」

と言っただけの誰にも知られていない。

そして、ケティがその場で崩れ落ちていたのは見ていたくなかった
ので、早足で学院長室に向かった。

SIDE ケティ

今朝友達からルーラ様がフーケと交戦して怪我をしたらしいと聞いたからとても不安だった。

朝食にも来ていなかったし、学友たちも見られませんでした。

だから、廊下で会ったときはなにも傷がなくとても安心したんです。

でも・・・でも・・・ルーラ様は私のことを忘れてしまったとおっしゃいました。

自分には、あれらのアクセサリをつける資格がないと・・・

また『資格』という言葉を使いました。昨日までの彼なら絶対に使わないと思っていた言葉をあっさり使ったのです。

信じなくなかった。でも、信じるしかなかった・・・

彼が返してきたイヤリングと指輪を見て、私は悲しくなり、泣いてしまった・・・
友達に慰められても、泣き止むことはなかった・・・
たぶん、私はまたルーラ様に慰められることを待っていたから。
それまで、ずっと泣いていようと思ってしまったから。

SIDE OUT

僕は学院長室に着き、ノックをすると、中から。

「ルーラ君じゃな？入ってよろしいぞ。」

と言う声で僕は中に入った。

中には、今さっきあったタバサたちと教師たちが全員集まっていた。
なにやら、ルイズが杖を上げている。

「お待たせしました。」

「よいよい。して、調子はどうじゃ？」

「人を泣かせるのはとてもつらいと痛感しています・・・」
と、今の心情をそのまま伝える

「おまえ、まさかケティに・・・それに、アクセサリーも」
と、才人が恐る恐る聞いてくる

「その通りだよ・・・彼女を騙すこと自体が彼女を傷つける・・・
だから、返してきた・・・僕はもう彼女の知る僕じゃないんだから・

・・」

そういつて会話を打ち切る。

「で、今は何をしているんですか？」

「ミス・ロングビルが情報を入手しての。今からフーケを捕まえに行くつもりじゃ。それで、ミス・ヴァリエールが立候補したんじゃが・・・」

なぜかミス・ロングビルと呼ばれる教師が僕を睨んでいる。どうしたんだろう？

「私も行くわよ。」

と、キュルケが杖を上げる。

「私も」

と、タバサまで。

「じゃー、僕も」

と、言つて僕も上げる。

「君も行くのかの？」

「フーケに会えばなにか分かるかもしれないし、ここにいてもまたケティに会ってしまうかもしれない・・・」

「そうか、そうか」

それから、戦力の説明を受けた。

盗まれた品は二つ『破壊の杖』と『開かずノ本』。

キュルケは、有名なツェルプストー家で火のトライアングル。

タバサは既にシュヴェリエの称号を獲得。

ルイズは、強い使い魔をもっている。
俺はおまけ。

そして、今はミス・ロングビルの言う森に向かっている馬車に乗っている途中だ。

今日はフリッグの舞踏会らしい。まあ、舞踏会だ。

はあ、何か思い出せるといいな・・・

第8話く俺の心、そしてフーケ・・・く（後書き）

今日は後2回くらい更新するつもりです。ええくと、色々と理不尽なところがあるかもしれませんが・・・未熟ゆえです。お許しください。次回はフーケ編終了かと？

第9話　心からの帰還、トラブルの後の二人の仲はより深まるとかなんとか？

いやあー、なんだか色々とおかしいかもしれませんが・・・と、言うか、作者は恋愛経験なしなんで全然分かりません・・・すいません・・・

第9話　心からの帰還、トラブルの後の二人の仲はより深まるとかなんとか？

今日は空が澄み切っていた。

蒼く、青く、どこまでも続いていそうだった。

僕の頭の中は白かった。

白く、空虚で何もなく、どこまでも続いていた。

その片隅に一人の少女はいた。

今の僕では、気付くことすらできないくらい小さな・・・

第9話　心からの帰還、トラブルの後の二人の仲はより深まるとかなんとか？

曰く、4時間で着く森にフーケがいる。

曰く、黒ずくめのローブである。

曰く、宝物庫から2品盗んだ。

そんなフーケを探し僕たちがやってきた。

森の中を徒歩で進み、一つのボロ小屋を見つけた。
その中にフーケが潜んでいると。

そして、そこに向かうのは一番すばしっこい人物。

つまり、才人だ・・・同情しかねない・・・

こんな感情抱いたことはあったのだろうか？どうなのだろう？

才人がすばやく小屋の窓に近づき中を見て、誰もいないのを確認。僕たちを呼ぶ。ルイズは小屋の外の見回り、ミス・ロングビルは小屋以外の森の見回り。

僕、タバサとキュルケで小屋の中を調べる。

「あつた」

タバサが言った。

「本当？ なにかあつけないわね？」

と、キュルケもそれを見る。

たしかに、それは『破壊の杖』だった。

「へえ、これが『破壊の杖』ね・・・全然なにも感じないわ？ これ本当にお宝？」

「わからない」

彼女等二人はその宝に注目している。

そして、僕はもう一つの『開かずノ本』を探している。

ベッドの下、タンスの中、机の後ろ。探しても出てこない。

そんな時、外から

「きゃあああ！！！」

ルイズの悲鳴が聞こえ、小屋の屋根が吹き飛ぶ。見えたのは、岩でできた巨大な手。

その指の一本が欠け、その岩が小屋の床を貫く、そして、そこに現れたのは一冊の本・・・

『開かずノ本』であつた。

僕は、その本を取り、逃げようとしたところだった・・・
世界が黒に支配された・・・目の前が見えなくなった・・・
頭の中に声が響いた。

『我の声が聞こえる物よ・・・そなたは力を望むか？』

「ち・・・か・・・ら？」

『力だ。そなたはそう思ったことはないか？力が欲しい、と。』

「僕は・・・」

『ふむ、そなたは記憶を失ったと見えるの？まあ、直してやろう。
サービスだ。』

「な、なにを」

と、言おうとした瞬間、頭に電撃が走った。

頭が割れそうだった、痛い、痛い、イタイイタイイタイ！！

「ぐっ・・・はきそうだ・・・」

『思い出したかの？』

「ああ、おかげさまでね・・・早く帰らないと・・・僕はまたケテ
イを傷つけてしまったんだ・・・くそっ！」

『まあ、まあ。話を聞け。そなたは力を欲すか？』

「力、というと。どれは、どんな力だ？」

『そなたが欲する力だ』

「それは、なんなんだよ！」

『それは、そなたが一番知っているはずじゃ。』

「僕の欲しい力・・・」

僕は何が欲しいんだ・・・

一番最初に頭に浮かんだのはケティだった・・・今は彼女のことしか考えないらしい・・・

僕はケティに何をしてあげたいんだ・・・彼女を守ってあげたい・・・

僕が欲しい力とは？彼女を守る力か？違う、彼女だけじゃない・・・僕の守りたいものすべてを守る力だ・・・

『わかったようじゃな。では、そなたに力を与えよう。しかし、覚悟を決めよ！この力ただではないぞ！』

そういつて、僕の身体に何かが流れ込んできた・・・

SIDE才人

俺がルイズの悲鳴を聞いて外に飛び出すとそこにいたのは全長30メートル級のゴーレム。

この前見た奴だ！しかも、やべえルイズが！

「ルイズ逃げろ！」

「いやよ！私は逃げないわ！」

このやろっ！やろっじゃないけど！

俺はルイズに近づき持ち上げ、走り出す。
タバサのところまで持ち帰る。

「タバサ。あれ？ルーラは？」

「さあ」

ルーラはどこにいったんだろう？

「があああああー！！！！」

そのとき、何の声だか分からなかった。
しかし、この方向を見るとそこにいたのはルーラだった。
ルーラが持っていた本を開いていた。

「あの本って『開かずノ本』じゃないの？開いてるじゃん？」

「開かないはずよ！私も試したもの！」
と、ルイズが言う。

「私も試したわ」

「私も」

たぶん、授業で触る機会でもあったんだろう・・・

「じゃー、なんで」

って、こんな場合じゃない！ゴーレムが！

「ふん！その小僧！悪く思っなよ！」
って、やべえ！フーケがルーラを狙ってる！

ゴーレムは左腕を掲げ、それをルーラに向かって落とす。

ガン！

しかし、その拳は空中で止まった。
まるで、ルーラと拳の間に壁でもあるように。

「「「なっ！！！」」」
フーケ、ルイズ、キュルケの声。
驚いているのを見るとあれは、変らしい。

「あゝあゝあゝ！！！！」
更にルーラがヒートアップ(?)
ルーラは自分の胸部分の服を握り閉め膝を突きつづくまっている。

「なんなんだよ！あれは！」

「し、知らないわよ！」

「とにかく今はフーケのほうが先よ！」
と、言ってキュルケの判断により、フーケのゴーレムを先に倒すことになった。

SIDE OUT

SIDE タバサ

あれは異様だった。

彼の周りに渦巻く魔力。

まるで、それは闇そのものを表したかのような魔力。

魔力の密度が濃くなり具現化した現象。魔力の壁ができた。

しかし、彼はまだ苦しんでいる。

なぜ、彼には本が開いたんだろう。

1年のとき私が試しに先生に隠れて開けようとしたときは全然開かなかったのに・・・

彼はなにか特別？たしかに、特別だった。魔法が使えない・・・悪く特別だった。

それよりも今はゴーレムに集中しなければ・・・

死んでしまったら彼に質問すらできない・・・

今の彼なら攻撃は受けないだろう・・・

SIDE OUT

SIDE キュルケ

なんなのよあれ！

あんな恐ろしい魔力見たことないわ！

しかも、私が1年のときにふざけて開けようとした本まで開けてるし！

なんなのよあいつは！私の剣にはケチつけるし！

って、今はそれどころじゃない！

今は目の前のゴーレムをどうかしなといけないんだったわ。

死んでたまるもんですか！？

SIDE OUT

SIDE ルイズ

いつもイライラさせる、ルーラは記憶がなくなり、いなくなった。

そして、新生ルーラは私の下僕にでも仕立てようかと思ってた。

けど、今はどうだろう？あんな不気味なのいらなと思うっている。

あんな魔力みたことない・・・不気味で、不純で・・・見ていて吐き気がする。

しかも、私が一年のときツエルプストーに対抗して開けようとした本まで開けるし！

なんなのよ！『開かずノ本』なんて、ただの嘘っぱちじゃない！

SIDE OUT

僕の身体に何かが流れ込んできた。

それは、感情だった。

悲しみ、苦しみ、嫉妬、喜び、怒り、哀れみ。

しかし、一番多かったのが嫉妬だった・・・

この本は『開かずノ本』と言うのは、開かないから着いた名前だ。実際の名前は『深淵の書』

曰く、人の感情が記されている。

曰く、その多くが嫉妬の思念。

曰く、1000年前のもの。

曰く、妬みこそが人間の真理。

その感情すべてを受け止める。

それがあれの言っていた『覚悟』なんだろう。

やってやろうじゃないか！

僕のすべてをかけてやってもいい、僕は守ってみせる！

僕が守りたいものを！守る力を手に入れてみせる！

そうして、僕と感情との抗争が始まった。

気を緩めたら僕が乗っ取られてしまう。

乗っ取られたら最後・・・嫉妬の思いで人を殺すことになる。

何時間経っただろうか・・・

そう、感じさせたのは自分の精神世界にのめり込んでいたからで、実際外の時間だとそれは5分にも満たない時間だ。

人々の嫉妬の声が聞こえた・・・

『『あいつらが憎い！』』』

『俺だって、環境があれば・・・』

『私だってあれくらいの容姿があれば！』

『俺に金があれば!』

苦しい・・・うるさい・・・僕に言っな!

『『お前もそう思うだろ!』』

「ち・・・がう・・・」

『『なんだと!?!』』

「僕は・・・学んだ・・・人には完璧なんてない・・・かけている部分があつて当然だ・・・必要なのは、その自分と付き合つていくことだ・・・人を嫉妬するのも悪くない・・・ただ、嫉妬した後はどうだ?そのあと、お前らは何かしたか?相手を殺した?ふざけるな!」

僕はいつの間にか声を張り上げていた。

「殺してなにになる!殺してお前がどうなる!なにも変わらない!ひとを悲しませるだけだ!僕は学んだ!人を嫉妬した後に自分が何をすべきか!嫉妬して、相手を憎んだ後!・・・その人に近づこうと努力するのを・・・」

最後は泣きかけていた・・・コイツラは僕のおんなじだった・・・ただ、コイツラにはケティのような人物が現れなく・・・人を守りたいと思わなかったただだった・・・僕もコイツラになっていたかもしれない・・・

「だから、僕に力をくれ!それを僕に教えてくれた人を僕は守りたいんだ!この世の中から!」

そして、感情たちは静まり、元の黒い世界に戻った。

『そなたの答えしかと受け取った。そなたに力を与えた。』

「本当か？」

『ああ、本当じゃ。今からこの本の姿を変える。肌身離さずもっている。それに聞けばわかる。時がくればな』

「分かった。ありがとう」

『ふん。感情の集まりである我にはそのような言葉意味がないぞ。しかし、そこまで悪い気分でもない。．．．それでは、またいつか会おうではないかルーラ・ルイ・ラーク。我等を深淵から救った主よ』

そして、世界は元の世界に戻り、僕の指には指輪がはまっでいて。才人たちがゴーレムと戦っていて．．．

指輪から情報が流れる．．．

『肉体強化』

効果：筋力などの一時的向上

副作用：疲れる

弱点：一時的ということ

操作法：身体に流れる魔力の操作により向上したい箇所に魔力を集中させるイメージ。

指輪はちゃんと動いている。

指輪に描かれているのは炎．．．赤い、嫉妬の炎．．．僕の心のようだった．．．

僕は駆けた。あの時のように．．．

今は早く学院に戻りたい。その一心でゴーレムが邪魔だった。

「る、ルーラ！って、本は！」

「今はそれどころじゃないだろ！集中しろ！僕が足止めをするから何かしてくれ！」

「って、なんかお前変わってない？」

「変わってないよ！元に戻ったと言って欲しい！」

「って、記憶戻ったのかよ！」

「ああ、おかげさまで！」

僕は、ゴーレムに突っ込む。

足に魔力を集中するイメージ・・・

そして、跳ぶ・・・周りからしたら飛ぶように見えるだろうが・・・

一気に25メートルくらい跳び肩に乗る。

そこにいたのはフーケだった。心底驚いている。

「よお、また会ったなフーケ！いや、ミス・ロングビル！」

「なっ！あんた、記憶が戻ったのか！」

「おかげさまでな！」

そして、僕は杖がないのでフーケに殴りかかる。今回はおまけだったから戦闘なんて想定していなかったし。

「らあ！」

しかし、まあブレイドも避けられるんだから拳なんてたやすい。

僕の役割は倒すことじゃなくて、足止め。それでいい、ずっと避けさせていればいい。

肩の上と言う狭い空間で僕はフーケを幾度となく殴る。
そんな、僕に声が掛かる

「ルーラ！どいてくれ！」

その声で僕はゴーレムの肩から飛び降りた。

そして、着地の瞬間に足に魔力を集中させ、着地。
便利だな・・・

そして、僕が着地したあと、凄まじい爆音がした。
ルイズか？と一瞬思ったが、彼女自体あっけを取られている。

後ろを向くと、才人が破壊の杖を肩に構えていた。

その状態を見ると、才人が破壊の杖でゴーレムを破壊したのだろう。
まあ、どうあれ、これで、一件落着だ・・・

ミス・ロングビルはつかまり。僕たちは今帰り道の馬車の中。

「る、ルーラ本当に記憶戻ったのか？」

「ああ、戻ったって言っただろ？」

「よかったあ・・・」

才人ありがとう・・・

「で、アンタ今さっきの何？なにあれ、あんた飛んだじゃない？」

「違うよ。僕は跳んだんだ。ただのジャンプだよ。」

「はあ！あんたバカにしてるの？ジャンプであそこまでいけるはずないじゃない！ふざけないでよ！」

「いや、本当にただのジャンプだって！」

「嘘よ嘘！」

彼等にあの本のことを言うわけにはいかない・・・
まずは、学院長に報告だ。

学院長室

「ただいま、戻りました学院長」

「おお、よく戻ってきた。ワシからも礼を言うぞ。ありがとう」

「いえいえ、僕も収穫がありましたし。あ、それと記憶もどりしました。」

「それは、本当かの？それは良かった」と、学院長に報告する。

フーケがミス・ロングビルだったこと。
僕たちにシュヴェリエの称号が送られるらしい。

そして、報告を終了すると、

「学院長、あなたにお話がある。」

「あ、俺も」

と、僕と才人が両方言う。

「わかったぞい。では、行つてよいぞ」

と、言つて他のものを部屋から追い出す。

「で、話とは？」

「ええーと、まず俺から」

と、言つて才人が話し出す。

曰く、あの『破壊の杖』は才人の世界の武器。

曰く、あれは学院長の命の恩人の品。

曰く、その人物はワイバーンを一発で殺した。

曰く、その人物は死んだ。

才人はがつくしと肩を落とし、部屋から退出。

「で、君は？」

と、言つて僕は指輪を見せる。

「はて？これはなにかね？」

「これが『開かずノ本』だ。」

「は？」

「と、いつかあの本の名前は『深淵の書』だった。僕が開けた。」

「本当かの！？」

「ああ、すんなりあいたぞ?」

「ふむ、それで?」

「僕に力をくれた、あと、指輪も」

「そうか・・・それでは、それは君にあげよう・・・」

「ありがとうございます。ちなみに、力のことは誰にも言わないでくださいね。」

「うむ、分かっておる。」

そして、僕も部屋を出る。

「そういえば今日は舞踏会だったな・・・」

舞踏会会場

僕はケティを探していた。

しかし、どこにもいない。どうしよう・・・はやく謝りたいのに・・・

あ、あそこにいるのは、ケティの友達その1

「あ、あのケティどこにいるんですか?」

「って、る、ルーラ様!あなたって、人は最低です!また、ケティを傷つけて!」

「ちよっ！それここで言わないで！皆聞いてるから！」

「別にいいです！皆も聞いてください！」

「って、やめろよ！僕はあの時記憶が・・・」

「言い訳なんて見苦しいです！」

「言い訳じゃない！僕の話聞け！」

この友達その1は僕の話聞く気がないらしい・・・

「ちっ！もう、いい！自分で探す！」

そういつて、僕は会場のテラスに向かって走る。

「って、ちよつと待ってください！まだ話は終わってません！」

『あいつ、ケティと付き合ってるんじゃないか？』

『ひでえ、やつだな。たぶらかした後に傷つけるなんて』

「ほら、言っただろう！あいつは卑怯なんだ！」

これはギーシュです。

僕はそんな言葉無視してテラスに走る。

そこには才人がいた。飲んでいた・・・

「おお、ルーラお前も飲むか？」

「今はそれどころじゃないんだ！すまん！あと、あの友達を説得し
といてくれないか！頼む！」

「まあ、いいけど。」

「ルーラ様待つてください！」

「僕が記憶失ったこと信じてくれないんだ！」
本当に迷惑だ！

「ちょっと、そのケティの友達さん！止まって止まって！」

「あなたに用はありません！どいてください！」
そして、僕はそのテラスから身を投げる。

「って、る、ルーラ様こんなところから落ちたら！」

と、言って友達その1がテラスから下を見ると、もう僕はものすこ
い離れた場所に見えるはずだ。
今は、力の無駄遣い中である。

僕は急いで学園中を回った。

それでも、見つからない・・・

そして、最後に行き着いたのは、おなじみに木陰・・・

そこに僕は座り込んだ・・・

さすがに僕は女子寮に入るわけにはいかない・・・

ハア・・・結局僕の初恋（？）はこうやって終るのかな？
と落ち込んでいるときであった

ガサッ

後ろで誰かが動いた・・・まさか、この前みたいにタバサか？

じゃなくて、僕はその人に言ってみた・・・期待はしていなかった

「ケティ？」

しかし、期待を裏切って、その人物は

「ルーラ様・・・」

ケティだった・・・

なんて言おう・・・

「あのさ・・・今朝の僕は・・・」

「分かってます・・・記憶がなかったのでしょうか？」

「そうなんだ・・・けど、それでも、謝りたい・・・」
「ごめん」

「あれほど、私に謝らないでって言ったのに・・・」

「ごめん・・・」

って、僕謝ってばっかだな・・・

そして、彼女は僕のほうに歩いてくる。

僕も彼女のほうに行こうと立ち上がり、歩き出す。

そして、彼女は僕に抱きつく。ずっと、なにかを望んでいたように・・・

「う・・・グス・・・ルーラ様・・・ルーラ様・・・」
僕はまた彼女を泣かしたのか・・・

「ケティ・・・」

そつと、彼女の髪を撫でる

「今回も慰めてください・・・いつもみたいに・・・」
そついつて、僕の胸に顔を埋める。

「いいよ。僕はいつでも慰めよう。」

そついつて、彼女を抱いてあげる。

それは、初めてあったあのときのよう。
変わったことといえば。今彼女が僕に慰めを求めている、自分もまた彼女を慰めようとしていること。

それから、10分くらいその状態でいた。

そして、僕は彼女に言う。

「なあ、ケティ。今アクセサリーもっているかい？」

「ええ、もってますよ？付けましょうか？」

「いや、ここでじゃない。だから、行こう」

「え？どこで付けるんですか？」

「決まってるだろ？今から踊りに行くんだ！」

これが、今日の僕との決別の証。より多くの人に見てもらおう、今日からの僕の証を。

「え、ええ！でも、お洋服とか用意してないし・・・」

「大丈夫だよ、僕もだから」

そう、僕はケティを探していただけで、踊る気はなかったから制服だ。

そうして、僕はケティの手を引っ張り、彼女を連れて行く。

「る、ルーラ様自分で歩きます。手を放してください。」

「いやだよ、ケティ。僕はもう絶対この手を放さない。そう、誓ったんだ。」

我ながらくさいセリフである。

このごろ、ケティにだけはいいセリフが言える。

「じゃ、じゃー、絶対に私のこと放さないくださいね・・・？」

「ああ、誓うよ。ブリミルなんかじゃなくて、君に。」

それは、他の生徒に聞かれたら異端と言われるかもしれない・・・

「では、行きましょう。」

今は彼女が僕の手を引っ張る感じになっている。

そして、5分くらいで会場に着く。

まだ、会場では皆が踊っている。

僕とケティは、ケティに引っ張られる形で入場した。

『おい！ケティとルーラだぞ！』

『おお！ケティちゃんここで制裁を下すのか！？』

『いいざまだ！』

「諸君！見ていたまえ！あのルーラが制裁を下される瞬間を！」
おお、ナイス宣伝だギーシュ！

才人がこつちを見ている。心配そうな目で。

友達その1も申し訳なさそうな目でこつちを見て、目が合ったときは笑ってくれた。

まあ、大丈夫だろう・・・

「さあ、ケティ」

「はい、ルーラ様」

皆が、注目している。

ケティがアクセサリーを取り出し、僕に王冠のイヤリングと翼の髪飾りを渡す。

僕に付けるという意味だろう。けど、最初にケティが付けてくれた。

耳に掛かった髪をどかし、そっと、耳に触れ、それが心地よく、僕は少し動揺する。

そして、そこにイヤリングを付ける。剣のデザインのイヤリングが光の中輝く。

そして、僕の手を取り、きつとわざと、翼の指輪を薬指に嵌めた。

周りは少し勘違いしていたんだろう。

制裁なんかじゃない。その真逆、僕は祝福されているのだ。

僕は、ケティから受け取ったイヤリングと髪飾りを彼女に付ける。まず、髪飾りから。彼女の髪をそつと撫で、彼女は気持ちいいのか、目を細める。

そして、前付けていた場所に髪飾りを付ける。

そして、彼女がやったように、耳に掛かった髪をどかし、耳に触れる。そして、彼女は赤くなる。

そして、そこにイヤリングを付ける。王冠のデザインが光の中で輝く。

その間、すべてが静まる、全員がこっちに注目している。

そして、僕は極め付けに。

「ケティ、好きだよ・・・これから、よろしく。」
と、告白しました・・・恥ずかしい！

「わ、私も、ルーラ様のこと・・・大好きです・・・」
と、言ってこっちに唇を突き出す。くちづけを求めているのだろう・・・

そして、僕はそれを断る理由も気もない・・・

だから、僕は・・・彼女の唇と自分の唇を重ねた。

これで、二度目だった。でも、今回は全開と違った感覚がした。なにかが、自分の中から消えていった。

それが、なんだったのかは分からない・・・でも、それが、心地よかった。

彼女の唇の温もりを感じながら、僕は願った。

彼女を守るように・・・彼女が傷つかないように・・・

唇を放す・・・

そして、彼女の顔をのぞく込む。目が合う。彼女の顔は頬が朱色に染まっていた。

彼女は恥ずかしがっていた。それくらい、表情を見なくても分かった、でも、確認したかった。

僕も恥ずかしかったし、顔も赤いだろう・・・

けど、そんなこと関係ない・・・

「ケティ・・・踊ろうか？」

「はい・・・」

と、言って僕は彼女の腰に手を回し踊る。

その場で踊っているのは僕たちだけだった。他の人はあっけをとられている人と、僕たちを見守っている。

そして、曲が終る。そして、彼女の手を取りテラスに去る。

そこに残ったのは、拍手の音だけだった。

第9話　心からの帰還、トラブルの後の二人の仲はより深まるとかなんとか？

今回は、なんとか終わりました。色々とすっ飛ばしています。次回は、外伝にしようかと・・・次でギーシュと仲直りさせたい・・・ギーシュは結構好きだったりする。

第10話 騎士と姫の一日、友人を助ける

（前書き）

久しぶりの更新です。まだ、読んでくれている人がいるか知りおませんが、書きました。題名だとケティが出てくるような感じですけど、ぜんぜん出てきません。どちらかというと、俺はルーラの話です。

第10話　騎士と姫の一日、友人を助ける

あの舞踏会以来、僕とケティは学院公認恋人になった・・・それは、いいことなのか悪いことなのか・・・まあ、ケティが嬉しければいいのだが・・・

そして、周りからの俺の評価も変わり始めた。

この前の騒ぎを『騎士と姫』の物語と、言うものと『狼とか弱い少女』と言うものに分かれ始め。

前者には俺の人気は上がった。当然後者の人たちには人气が下がったか平行線か・・・

主に、前者が1年、2年女生徒、3年で、後者が2年男子生徒だ。相変わらず、男子からの人気がない・・・少し困ってきたな・・・

第10話　騎士と姫の一日、友人を助ける

今日は、昨日の舞踏会があったため、代休になっている。

僕は昨日ケティにしたことを思い出しベッドの中で悶えている・・・恥ずかしい・・・かなり、非常に恥ずかしい・・・皆に顔が合わせられない・・・あんなきざな態度取ったし・・・

そんな時僕の部屋のドアにノックの音が響いた。

僕は、だるいながらもベッドから身体を落とし、のそのそとドアに向かって歩く。

そして、ドアの近くで。

「どなたですか？」

と、尋ねてみたところ。

「も、モンモランシーよ。」

モンモランシーだと・・・なにかしたかな？

実はこの人とはまったく交流がない・・・

「はい」

と、言っでドアを開けると、なにかびっくりしてる。

「なにか？」

「寝癖がすごいわ・・・」

「お前だつて巻き毛のロールがすげえよ」

「なにか言つた？」

「いえ、何も・・・」

いつもマリアにやつてもらってるんだつた・・・

休みは自分で時間かけてやるけど・・・

「ちょっと待ってて・・・」

と、言っで部屋に入つて5分、僕と寝癖の激しい戦いが始まつた。

「はい、どうぞ」

と、寝癖を直すついでに着替えた。

「ありがとう」

と、言って彼女が僕の部屋に入る。

「でも、いいの？僕の部屋なんて来て？ギーシュが怒ったり？」

「それなら、あなたもいいの？私なんか部屋にあげて？ケティが悲しむんじゃない？」

「ははは。何を言ってるんだ？俺がそんな事しないのは彼女も知ってるよ？」

「相思相愛ってわけね・・・」

「で、今日はなんの用かなミス・モンモランシー」

「あのね・・・」

そう言って、彼女がベッドに腰をかけ、俺は椅子に腰をかける。

「このごろ、ギーシュが元氣ないの・・・」

「あちゃー・・・」

「『あちゃー』ってなに？理由知ってるの？」

「逆に聞くけど、ミス・モンモランシーは知らないのか？」

「ええ・・・心当たりなら・・・」

「言ってみ」

つか、分からないほうがおかしい・・・

「昨日私が彼のケーキ食べちゃった・・・」

それは、ギーシュにとってはいいことじゃないかな？

「そんな事じゃないよ・・・はあ、じゃ、説明するよ。」

と、説明をしようとした瞬間に『コイツ謀ったな』というタイミングで来ました。ケティです。

「ルーラ様おはようございます・・・って、何でミス・モンモランシーが？」

「というか、何でミス・ロッタがこんなに早く？」

「私は、ここでルーラ様と朝食を取る予定なのです。」

「そういうば、ルーラってここで食べてたのね。」

「そうだよ。いつもマリアが運んできてくれる。そろそろくると思うよ。」

「で、なぜミス・モンモランシーが『私がいまだ触れた事のない』ベッドの上にいるんですか？」

「あ・・・すみません。」

ケティ、怖いよ少し殺気が出てらっしゃる・・・

「ああ・・・ケティ？」

これは、俺も殺されるかも・・・

「今日町に行くって話し・・・来週でもいいかな・・・？」

「な、なんでですか！？わ、私ずっと楽しみにしてたのに・・・まさか、ミス・モンモランシーと！？」

「違う！その発想は間違っているぞ！」

「な、なんで私がこんなやつと！？」
モンモランシーもひどい！

「こんな奴とは何ですか？ルーラ様以上の男性なんていません！」
ありがとーケティ・・・

「まあ、その話は置いて・・・まあ、これから友でも助けに行こうかな、と」

「友ですか？」

「ああ、なんだかこの頃ギーシュが元気ないらしいんだ・・・で、まあ、主な原因は俺が打ち負かして、昨日のラブシーンだと思っただよね・・・」

そう、主に昨日のラブシーンが・・・やっべ・・・顔熱い・・・

「昨日の・・・ですか？」

ケティまで顔を赤くしないでくれ、もっと恥ずかしくなるから・・・

「あら？私は二人ともお似合いだなあーって思ったけど？」
ありがと、モンモランシー・・・

「それは、君が女生徒だからだろう・・・男子生徒から見たら俺は親の仇みたいなもんなんだよ・・・特に『モテナイ組』にはね・・・

「なにその『モテナイ組』って？自分が悪いんじゃないの？」

「まあ、男には男の事情があるんだよ・・・」

「そうなの・・・」

ふうー、じゃー今からギーシュ復活の策でも立てるか・・・

「ええーと、じゃーギーシュ復活に案がある人お？」

「・・・・・・」

おい！お前らやる気あるのか・・・

「二人ともないのね・・・」

「ないから相談にきたんだけど・・・」

それも、そうだねモンモランシー・・・

「ギーシュ様なんてどうでもいいです・・・」

まあ、そういわずに・・・

「そうか・・・うーん、じゃー、何しよう・・・」

「なんとかしてよルーラ・・・」

自分で解決するという策はないのか？

「ああ、じゃー、とにかく話に言ってくるか・・・」

「いつてらっしゃいませ、私たちはここでくつろいでますね。」

中庭、カフェ(?)

ギーシュはどこかな？

お、いたいた。一人で紅茶飲んでるな・・・まあ、朝早いし・・・
モンモランシーもご苦労だねこんな朝早くから
さあ、どうやって話しかけようか・・・

選択肢は3つだ！

？モンモランシーのことは伏せて説得

？モンモランシーのことを言って説得

？まったく、違う方法で説得

うーん・・・一番好ましいのは？かな・・・

？は？が失敗したらで、？は思いつかないや・・・

よし、？で行ってみよう！

今は朝なおかげで人はぜんぜんいないし、好都合だ

「おはようギーシュ。一緒にいいかな？」

「いいと思うと思っているのかい？」

「いや、ぜんぜん思っていないよ。」

「ふん。なら何処かへ言ったらどうだ？愛しのミス・ロットが待つ
てるんじゃないのか？」

お、言ってくれるな・・・けど、ここから切り込める

「まあ、待つてるだろうけど・・・君のほうはどうなんだい？ミス・

モンモランシーとお付き合いしているんじゃないのか？」

「そうだよ。」

「じゃー、なぜ君はここに『一人』でいるんだい？」

「君に関係ないだろ！」

そう叫んでギーシュが杖を取り出す。

「ここで戦いたいのかい？」

「ふん。望むところだ。この前は油断したけど、今回は負けない！」
そして、またしても・・・この1週間でお前は何回すればいいんだ
い？

「いや、ちょっとまて

」

「諸君！決闘だ！！」

「待てよー！！！！」

自室

「で・・・また決闘になったんですか？」

「ああ・・・成り行きで・・・」

「まったく、解決してくれるんじゃないの!？」
ただいま、絶賛説教中……

「いや、俺が断る前にあいつが大声で言いやがって……」

「まあ、じゃー、ギーシュ様を倒した後に説得すればいいんですね」

「まあ、そうかな……手荒なまねは嫌なんだけどな……」

「はあ……あんたに頼むんじゃないかったかしら……」

「まあ、ギーシュも今思春期なんだ。いろいろ盛ってるんだろ……」
と、適当に結論付けて僕は二人を帰した。

またしてもヴェストリの広場

「よく、逃げずに来たな!」

「なんだか、この前も聞いたような……」

「いや、けど、お前前回も負けてるのにいいのか?」

「そこまで、僕はいじめる趣味はないぞ?」

「前回の僕とは思わないほうがいいぞ!僕は生まれ変わったんだ!」
マジか!

「じゃー、その実力見せてみる!」

「言われるまでもない!!」

そうして、僕たちの決闘の狼煙が上がった。

僕はブレイドを唱えた杖を構える。

ギーシュは一体のワルキューレ錬金する。

「一体のいいのか？ 前は6対で負けたのに。」
ギーシュは答えない。

さすがに、ギーシュ相手に肉体強化は使わないつもりだ。

「行け！ワルキューレ！」

ギーシュがワルキューレに命令を下し、僕に突っ込ませてくる。
僕もワルキューレに突っ込みに行く。

「前回となにも変わってないなギーシュ！」

「それはどうか！」

そして、ギーシュは突っ込ませたワルキューレを止め、後ろに引かせる。

僕は一瞬動揺して動きを止めてしまう。

「錬金！」

ギーシュが再び錬金を唱えると、僕の足元から手が伸びてくる。
そして、僕の足首を掴む。

「なっ！」

どうやら、ギーシュは貴族のプライドを捨て、僕に勝ちに来たよう

だ。

この展開は予想しいなかった！

「くっ」

「錬金！」

そして、再びギーシュが錬金をして、3体ワルキューレを増やす。
4方向からのはさみうちか。

「敵を討て！」

そして、4方向から突っ込んでくるワルキューレ。
全員が手に、剣、ランスその他凶器を持っている。

やばい！

そう思った瞬間、僕は行動をしていた。
体に痛みが走り、跳んでいた。

SIDEギーシュ

今回はルーラに勝ちに行った。

貴族のプライドの前に僕のプライドが許さない！

まず、1体のワルキューレで彼の注意をそらす。

次に、ワルキューレを下がらせ地面から手を錬金し彼の足首を掴む。
そして、最後に3体新たにワルキューレを錬金し彼を4方向から挟み撃ちにかける。

我ながら完璧な計画だった。

はず・・・だった・・・

ルーラは今僕の前にいない・・・
どこへ行ったか？

彼は今・・・空中にいる。

飛んでいる・・・人間にはありえない・・・
彼は一体なんなんだ？

S I D E O U T

S I D E タバサ

また、ギーシュとルーラが決闘をしているらしいと聞き、今私はキ
ユルケと見に来ている。

3階の窓から観戦していたのだ。

最初はどうせギーシュが負けると思っていた。
しかし、それは嘘となってしまった。

ルーラが油断していたのも大きいが、ギーシュにはなかなか
作戦だったと思う。

でも・・・ルーラはそれを遥かに越えていた。

私たちのいる3階は地上12～15マイルだ。

今彼はそれを越えている。目測で25～30マイル程度だ・・・

人間が飛べる高さではない・・・

「ねえ・・・あれってなんなの・・・」

隣にいるキユルケを見ると彼女の目は、憧れでもなく、驚きでもなく、歓喜でもなく、そこには恐怖の色で染まっていた・・・

「さすがに、あれは人間じゃないわ・・・」

その通り、あれは人間業じゃない・・・

彼を見ると、今落下中だ。

全員が全員呆気をとられている。

時間が凍っていた。何が起こっていたか分かっていない。

私たちの前には、人間あらざる人間がいるのだ・・・

ルーラ・・・あなたは一体誰？

S I D E O U T

な、なんでだ！？

て、言うか痛い！！

「ぐっ！」

やばい、このままじゃ体制を整えて着地できない！

だんだん地面が迫ってくる。

そして、地面と接触するはずだった瞬間・・・また、痛みが走った。

着地は成功した。と、同時に俺は体制を崩した。

「ぐああああ！！」

地面にのた打ち回る。

痛い痛い痛い痛い！

そして、思い出す。この痛みを。

この、妬み、悲しみを・・・

お前なのか？

“あはは そうだよ？僕が君を操ってるのさ”

お前は誰・・・だ？

“僕の名前はシリアだよ 現在のこの指輪の最高権力者？”

前の・・・前のやつはどうした・・・？

“ああ、あのおじさん？君に本をあげたからってみんなに殺されちゃったよ？”

みんなとは・・・その本の中の住人のことか？

“それ以外ないでしょ？幾年もの負の感情がひとつの世界を築くなんてすごいよねえ”

なぜ・・・なぜ、僕の体を操った・・・この力は見せたくないんだ・・・

“だってえゝ 君に死なれると困るんだよねえゝ。次は僕が殺されちゃうかも？”

お前らの事情なんて知らない！

“あるえゝ？そんなこと言っているのかなあ？僕は君の体を操っているんだよ？なんなら、あの『ケティ』とか言う人。殺しちゃうよ？”

ふ．．．ざ．．．．．

そして、僕の意識は途切れた．．
何もしてないといいな．．

SIDE ギーシュ

ルーラが落下（？）してから、10秒ほど経過した。

彼は一向に起きる気配がない。

僕が何かやったのだろうか？いや、けど何もしていないし？

「おい！ルーラが動かないぞ？」

「ギーシュが勝ったんじゃないか？」

この発言がその広場にいる人の火種になった。

「おお、ギーシュすげえ！」

「ギーシュ様！さすがです！」

僕のファンクラブも復活かな？

「けど、何をしたんだ？」

「それが分からないからすごいんだろ？」

と、そんな感じで、いろいろ言っているのだが・・・

「だ、誰か！彼を保健室に運んでおいでくれ！」

まずは、彼を連れて行かなければ・・・

さすがに、子供の決闘で殺すのはまずい・・・

「おお、勝ったのに、相手を気遣うなんて！」

「人間できてる！」

「ギーシュ様すてきい！」

僕の株はうなぎのぼりだ！

SIDE OUT

SIDE キュルケ

最初に思ったのは、興味、そして、次は感心、そして、最後は恐怖。

しかし、彼は今地面にひれ伏している。

あの、恐怖はうそだったのだろうか？

いや、それはない・・・あの感覚は確かに『恐怖』だったはずだ。

それなら、なぜそれを与えた彼が、あのギーシュに負けるとは思わない・・・

なら、彼に何か？

あの、跳躍力になにか関係している？

そして、今感じているのは探究心。

彼のことを知りたい。

まあ、ダーリンほどではないけどね。

S I D E O U T

その世界は孤独・・・

その世界は寂しく・・・

その世界が悲しい・・・

僕はそんな世界にいる。

・・・ようこそ、僕たちの世界へ

そんな看板が立っている・・・これだけが、場違いだ・・・

いや、そう思うと自分もここに場違いではないのだろうか？

不思議と、ここが始めての感覚ではない・・・

僕は来たことがある？

僕はここを知っている？

ここは僕の居場所？

そう考えながら歩いていると、次の看板にたどり着いた。

・・・そうだよ？だって、本が君を選んだんだから。

本が俺を選んだ？

俺は本に勝ったんじゃないのか？

・・・人の心に勝つなんて不可能だよ？人のもっとも強い力は妬み、憎しみ、怒り！負の感情だもの！

負の・・・感情・・・？

・・・そう、負の感情！人を妬み！恨み！憎み！人は強くなるんだ！考えるだけで、ゾクゾクするでしょ？

妬み・・・恨み・・・憎む・・・

・・・そう、その活きだよ！

けど・・・僕は・・・もう・・・やめたいんだ・・・この世界をきれいに見たいんだ・・・

・・・この世なんて全部汚いじゃない？人をだまして！利用して！切り捨てて！

力が欲しいんだろう！それなら、人を憎むんだ！この世界を呪え！君が今までの人生どんな扱いを受けてきたんだ？

今まで・・・俺は・・・

そして、俺の意識が覚醒した。

「知らない天井だ・・・」

ここは・・・どこだ？

「起きたのかね？」
誰だ？

「ギーシュ・・・」

そこにいたのは以外にもギーシュであった。

「僕で悪かったね・・・」

いや、誰にも期待してないから。

「で、何か用？この様子だと決闘は僕の負けだし。謝るよ。」

「いや、いい。君の様子を見に来ただけだ。」

「なにか、罰とかないの？」

「いいよ。君に勝ったおかげで株が上がった。」
「そうかよ・・・」

「それじゃ、僕は帰らせてもらつよ。」

「ちょっと待て。」

「まだ、言いたいことが！」

・・・ズキン・・・

「くっ！」

「頭が・・・ぐっ！」

「どうしたんだね？」

「なんでも・・・ない・・・」

「いや、そんなことないだろう。明らかに頭を押さえてるじゃないか。待っている、今先生を呼んでくる。」

「いい・・・呼ぶな。お前に言いたいことがあるんだ・・・」

「僕に？」

「大切なものつてのはな・・・失くして・・・初めて・・・その大切さが分かるんだよ・・・」

「だからさ・・・ギーシュ・・・君の大切なものはなにか良く考えるんだ・・・」

そして、俺の意識はまた切れた。

起きたときに、ケティがものすごく心配していて（自分では泣いていないといていたが）大変だった。

そして、モンモランシーには感謝された・・・ケティ経由で。

これで、俺の役目は終わりかな・・・？

第10話 騎士と姫の一日、友人を助ける

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

第11話〜温もり〜（前書き）

なんか、前投稿がすごい昔だ。気まぐれで更新しています。作品が多数ありますが、どれを更新するかもきつと気まぐれになっています。こんな気まぐれな作者ですが、よろしく願います。

第11話　温もり

ギーシュとの決闘（？）以来僕の中に住み着いた存在は害はなかった
時々、話しかけてくるくらいでなにをするでもなく、しかし、僕の
心になにかを残していた
虚しさ、悲しさ、切なさ……
きつと、彼女はあの感情たちの一つ……まだ夢の中で苦し
んでいるんだろう

第11話　温もり

僕とはなんだ？
僕とはルーラ？それともラーク？はたまたミドルのルイ？
いや、どれも僕ではない……それと同時に僕は全部だ
ルーラな僕、ラークな僕、ルイな僕

きつとすべてが僕なんだろう

しかし、才人はどうだろう？

彼はいまどこにいるだろうか？

今、床にいる．．．．．

変か？しかし、床、ないしは地面にはいつくばっているという状態だ．．．．．

「これはなんだろうか、フェルノ？」

今は授業に行く途中だ

「にゃあ〜？」

さあ？と言つように首をかしげる猫は僕の使い魔の猫

「僕には人間を地面に虐げる独裁者のイメージしか沸いてこないよ．．．．．なあ、ルイズ？」

「なによ？文句あるの？」

「あるとも．．．．．そもそも人間は地面にいるものじゃない。

少なくとも4本足で歩かないな

次に……才人がかわいそうじゃないか？」

「そうだ！かわいそうだ！」

「『わん』でしょ！」

「わん！」

これは、ひどい……

「ルーラ様？と……才人さん？ルイズさん何をやっているんですか？」

そこに登場する僕の最愛のケティ

まだ、あれから買い物に行っていないので少し最近ご機嫌斜めだ

「見て分らないの？「SMプレイ」よって違う！ルーラ台詞かぶせないで！もう、勘違いされるでしょ！」

声をかぶせてみた

まあ、ありのままを言ってみただけだね

「でも、ルイズさん・・・・・・・・勘違いされてもおかしくない状況ですよ？」

「自分の使い魔（人間）を地面に這いつくばせてそれを鞭打ちやら、首輪をつけるなんて。もうあっちの趣味しか連想されないぞ？」
そんな事を言つて、ケティの手を取りその場を早々と離脱する
目立ちたくないしな

「ルーラ様、手はつながなくてもはぐれませんか？」

「あ、ああ。そうだったね・・・・・・・・いや、どうしても手が伸びちゃうんだ。」

苦し紛れに言い訳をするが、おれが案外彼女にきいたようだ

「もう・・・・・・・・」

少し、頬を膨らましこっちを見る彼女は愛くるしいかぎりである

「ルーラ様・・・・・・・・」

「何？」

「授業はもう抜け出さないでくださいね？」
突拍子の無い事を言うのであった

「え？なんで？俺聞いてても意味ないしさ」

一日の授業の半分くらいは抜け出している

それでも、成績は中くらいを保っているので大丈夫だろうと考えていたのだが

「聞いていればもつといい成績が取れます！そうすれば、周りから舐められるようなことはありません」

「ええ？でも、僕舐められてもいいよ？ケティは僕のこと分かってくれてるし。才人だって、マリアだって分かってくれてる。」

「それでもです……私はルーラ様が見下されるのが嫌なんです。本当は周りの人達よりぜんでできるのに……」

おいおい、そんな悲しい顔で言われたらやるっきゃないじゃないか？それに、僕ぜんでできないよ？きつと……比べた事無い

「ああ……分かったよ……ちゃんと出るから。そんな悲しい顔しないでくれ」

「ほ、本当ですか！？」

いきなり明るい顔になる彼女もなにかハムスターが何かを連想させるものだ

「ああ、約束しよう」

「じゃあ、猫さんもちゃんと見ててくださいね？」

「にゃあー」

フェルノが買われたようだ……

まあ、ケティの頼みだし、断れないか

「おっほん。今日の授業はすべて中止です」

あらまー、僕が授業に出る気が出てきた突端これだよ。

まいっちゃうよなー……

なんでも今日はお姫様が来てくれるようだ。

というか、それですべて授業中止となると本当に気楽な学校だと思えてきた。

その知らせを聞いた直後僕は教室から退出しようとしたが、そこに不意にタバサが話しかけてきた。

「どこに？」

「部屋に。お姫様とか興味ない」

素っ気無く質問されたので素っ気無く返した。

「そう」

彼女も納得したのか僕の隣で歩き始めた。

「で、キミは？」

興味本位で聞いてみたが、大体分かる。

「私も部屋に戻る」

分かっていたよ。彼女ならやりかねないとね。

「そうですか」

あきれた。これでは、まるで共犯者みたいじゃないか。

二人で寮が別れるまで歩き別れる。

別れの挨拶くらいしかしなかったけど。

「ただいま」

誰もいないはずの部屋に入る。

一応は挨拶をするのが礼儀だと思う。

「おかえりなさいませ」

しかし、予想に反してそこにはマリアがいた。

「あれ？マリア今日は実家に戻ってるはずじゃないのか？」

そう、マリアには今日休みを与えて実家に帰ると言っていたのだ。

「それが、王女殿下が学園に参るとのことで行けなくなってしまいました。」

はあ、もう全部が王女王女。

そこまで重要な人物なのだろうか？見たことないから知らないけど。

「そうか。僕これからサボるから、何か食べようか？」

「あれ？王女様が参られるはずですが？」

そりゃ、普通は王女のところに行くだろうな。

「フェルノに行かせよう。そうすれば、主人の僕も見ていることに

なるだろう。」

そういつて、フェルノに話しかける。

「行ってもらって良いかなフェルノ？」

撫でながら言えば大抵の事は了承してくれる。

そのあたりは普通の猫なのかもしれない。

「にゃー」

了承してくれたらしい。

「よし、じゃ僕は厨房から何か食べ物を買ってくるよ。」

「いえ、私が持つてきますよ」

マリアが自分でやろうとするが。僕はそれを止める。

「いいよ、マリアは此处で待つてくれ。今日も十分働いただろ？」
そういつて、厨房への道を歩き始めた。

厨房に入るといつも通りの食の匂いが充満していた。
使用人たちは今日の晩餐のために色々用意をしているようだ。

「すみません」

一人の使用人に話しかける。

「は、はい！何でございましょうか貴族様！」
行き成り、怖がり始めたのだ。

そう、これが普通。貴族とは平民を虐げる存在。
貴族は平民に怖がられる。自分の領でもそうだ。
どこに行っただってそうだ。

「少し食事をもらえないだろうか？」
そう、優しく話しかける。

そうすると僕がそこまでひどい人じゃないと分かると。

「はい、今すぐ」
そう言っ、厨房の奥に消えていった。

少し経つと、料理長のマルトーがやってきた。

「貴族の坊ちゃんこれでよろしいでしょうか？」
そうして、トレイで料理を運んできてくれる。

「ああ、それで十分だ」
運ばれてきたのは簡単な昼だ。

「それにしても、貴族の坊ちゃん。話では今から王女が参るらしいですよ？」

僕のことを気にしてくれているんだろう。

「お気遣いありがとう料理長マルトー。でも、僕は王女なんて興味ないんだ」

そう、きっぱり言いトレイを貰い部屋に戻ることにした。

道中校門のほうに集まっていくな生徒達が多数見えたが、きっと王女様を見に行ったんだろう。
見えていて、なにが楽しいのか……

「マリア、お待たせ」
部屋に入る。

「はあ、本当に持ってくるとは」
あきれた。

たぶん、道中、友達か教師に捕まって王女を見に行っと思ったの
だろう。

しかし、今日の僕は運が良いのか誰にも会っていない。

「さあ、食べようよ」

そうして、マリアと二人で食事をする。

「こうやってマリアと一緒に昼ごはんを食べるのは久しぶりだね？」

そう、マリアは食事を運んでくれると一緒に食べる事は稀なのだ。

「そうですね。」

素っ気無く答えられる。

基本的にマリアは静かな女性だ。まあ、だから専属にしたのだが。

「懐かしいな、昔はずっとマリアと一緒にいられたのにね」

そう、昔は領地で楽しく毎日を過ごした。

魔法なんて知らなくても子供でいられた。

魔法なんてなければ僕は人を恨まずにすんだ。

「ルーラ様……」

そんな僕が心配になったのかマリアも不安になってきたみたいだ。

「魔法なんてなければ……なんて普通言わないよな」

魔法が使えないものは平民。

平民は貴族に虐げられる。

そんな生活は嫌だ、と思う反面、腐った貴族の仲間であることも嫌だった。

「はい、ルーラ様は普通ではありません」

小さく微笑みながらマリアは僕に言った。

普通じゃないからついてきた。
普通じゃないからお世話がしなくなった。
まるで、そう言っているようだった。

食事が終わった後、僕は眠りについた。
久しぶりにベッドで昼寝をする。

夢を見た。

僕が居た、シリアが居た。

どこまでも赤い空間。

どこまでも続いていそうで、でも目の前で終わりが見えてしまい
うな、脆い空間。

そこに椅子が2つとテーブルが並んでいる。
一つに僕が座り、もう一つにシリアが座る。

「やあ、ルーラ来たんだね？」

「いや、別に来た覚えはないが」

「そうだったね、此处はキミの中だもんネ」

「やっぱり、此处って僕の夢の中なのかい？」

「そうだよ？ここでは、キミは僕に会えるし、僕はキミに会える」

「僕に会って何がしたいんだ？」

「別にー？ただ、お話がしたいだけだよ？」

「そうか。何を話す？」

「そーだなー、キミの育ちとか聞いてみたいな？」

最後は別に疑問系じゃなくて良いんじゃないか？
と思ったがそこは気にしないでおう。

それから自分の過去について話し始めた。

僕の家はそこまで裕福な貴族ではなかった。

贅沢すれば破産は見え見えだった。それでも、親は見栄を張って色々買った。

そして、貧乏になる家庭、税金に苦しむ農民。

そこに、不出来の息子が登場した。

親は失望した。自分の息子が魔法を使えないなんて。

そう、まるで平民ではないか　　そう思っていた。

よくない政治、溜まるストレス、そして出来の悪い息子。

その3つが重なり、僕にとって地獄の日々の始まりだった。

毎日の用に行われる虐待。食事は自分で用意する。

日に日に痣が増えていく。使用人も減っていく。

その中、マリアだけが僕の味方だった。

いつもでも、僕の傍にいてくれた。僕が傷ついたときは慰めてくれた。

時々、母親代わりに一緒に寝てくれることもあった。

そして数年のときが流れた。

途中からもう虐待する事に飽きたのか、それは止まった。

それでも、親は僕の顔を見る事はなかった。

親の寝室の前を通れば「生まれてこなければよかった」などの声が聞こえる事もあった。

それでも、僕は生きていた。目的もなく。ただただ毎日を生きていく。

このただ生きていく日々になんの意味を見つけることも出来ずに。

運が向いたのか、領地の経営が上手くいき、家は裕福になった。

親も機嫌をなおし、僕のことを構うようになった。

しかし、僕から親を突き放したのだ。もう、お前等なんか信用できないと。

もう、すでに溝は深すぎたのだ。その埋める事のできない溝は、もう一生両者をつなげる事を拒んだ。

何年も親とは顔も合わせていない。

合わせる顔がない。もう、許してもいいんじゃないか？と思う反面、嫌だめだと思う自分がいる。

親の温もりを知らない、知る事のできなかった僕は結局許せなかった。そして、そのままこの学園にきた。

学園にきたって何か言い事があるわけじゃない。

魔法の使えない劣等性。何をやってもダメ。平民のような貴族。罵倒され、虐げられた。それでも、屈しない。屈しちゃいけないんだ。自分はまだ生きる。それだけが望みだった。僕が僕であるために、僕は屈しちゃいけない。その瞬間僕は僕でなくなってしまうから。

思ってみれば、僕の人生は短い。

まだ16年しか生きていないのだ。

でも、あまりに語る事がない。

幼少時代を寂しくすごした僕は精神がどこか欠落してるのかもしれない。

でも、誰もそんなことわからないのだ。

「へえー、これがキミなんだ？」

「ああ、これが僕だ。僕と言う人間が歩んできた道」

「ふーん………」

つまらなさそうに言うシリア。

「なんだ？期待なんてしていなかっただろ？」

「まあ、そうだけどさー。分かるよ、キミの気持ち」

「そーか．．．．．」

分かる．．．そう言ってくれた。

こいつは感情の塊だったな。分からない事はないのかもしれない。

「じゃあさ、僕はなにがほしいんだろうな？」

ためしに聞いてみた。

僕の生きる目的、意味を。

「そーだねー．．．」

少し考えるシリア。

その顔をうかがう事は出来ないがきつと、真剣に考えてくれているだろう。

「きつと．．ルーラは温もりが欲しいんじゃない？」

そう言って立ち上がる。

僕に一步一步近づいてくる。

「温もり．．．．．か」

自分の手を見る。

別に冷たいわけじゃない。

でも、特別温かいわけでもない。

「温もりって何だ？」

瞬間、甘い匂いがする。

女性特有の匂いだ。そして、ここには人は二人だけ。

僕とシリアだ。シリアが僕を後ろから抱きしめている。

時間が止まる感覚がする。心臓の鼓動が早くなる。

懐かしさが溢れる。目に涙が滲む。訳も分からず涙が落ちる。

「これが温もりだよ？」

そう言って彼女は一層強く抱きしめてくれる。

僕はその腕を掴むことしか出来なかった。

それから時間が経った。体感で10分くらいだろう。

その間ずっと抱きしめてもらっていたと考えると少し気恥ずかしくなる。

しかし、どこか安心する。彼女は僕のことを分かってくれている。

「もう時間だね」

そう言って、彼女は僕を開放する。

その瞬間一気に意識が覚醒する。

自分がいるのはベッドの上。足音がするのはマリアだろう。きっと部屋の片付けてもしているんだ。

顔の近くを感じる温かさはきつとフェルノだ。役目から帰ってきたんだな。

身体を起こす。

周りを見る。そこには椅子とテーブルがある。
似ている。今さっきまでの光景を見ているようだ。

窓の外を見るともう薄暗くなっている夜に近づいているようだ。
僕は椅子に座りマリアに話しかける。

「なあ、マリア。一つ頼んで良い？」

小声で頼みごとをするのもいつ振りだろうか。

「なんででしょうか？」

マリアが近づいてくる。

自分の後ろに立たせその腕を掴む。

そして、その腕を勝手に首の周りに回す。

「あの？ルーラ様？」

今さっきまでしていたのだ。

こうやって温もりを確かめたのだ。

夢のなかにあつて、現実にはないはずがない。
確かめたい。そして、感じていたいんだ。

「温かいよ、マリアは」

そこには確かにあった。

懐かしさを満たす。あの、温かさが。

その体制を数分続け、やめる。

少し、夢に浸りすぎたのだろう。気付いてみると恥ずかしい事をしてしまった。

顔に熱があるのが分かる。

「ご、ごめん」

少し俯きながら謝る。

「いえ、いつでもいいですよ」

優しく微笑んでくれる彼女は、昔と変わらなかった。いつまでもマリアはマリアでいてくれる。

そんな、彼女に僕は昔も今も未来も救われるのだろう。

「今までありがとうマリア。これからよろしくね」

改めて、言つと割と恥ずかしい。

恥ずかしさの連発である。

「はい。どこまでも着いていきます」

僕の前に跪く。そして僕もかがみ、目線を合わせる。

そして今度は僕から首に手を回した。

『ご主人ー、今日見たお姫様がいるー』

フェルノが話しかけてきたので、マリアを放す。

少し頬が紅潮している。

そして、フェルノがいる窓際に近づき窓の外を見ると、そこにはフ

ードを深く被りそそくさと女子寮に入っていく人影が見えた。

「あれが？本当に？」

半信半疑だった。だって、一国のお姫様がこんな時間に女子寮に行くはずがないのだ。

『うんー、本当だよー』

自信満々だったので、それを試す事にした。

ということで、ギーシュのところにやってきた。

「なあ、ギーシュ。今女子寮に姫様が入っていったのを見たんだ」
そう一言声をかけただけで彼は風の如く部屋から消えていた。
本当に、女性癖が悪い。

僕はまた部屋に戻り、眠りにつくことにした。
今日得た温もりを忘れることなく。

約束の初日から約束を破ってしまった。と思っただ、授業ではなかったし。

と、考えながらケティのことを考えて寝たのは彼しか知らないのであつた。

第11話『温もり』（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

今思ったけど、マリアの容姿とか、シリアの容姿とか説明入ってま
せんでした。

一応考えていた設定。

マリアは銀髪で瞳は青で、身長はルーラと同じくらい。おとなしい
静かな人です。

シリア、白髪で肌は焼けている。身長はルーラより頭半分くらい小
さいくらい。

第12話 頼ってくれ (前書き)

なんか勢いでやってしまいました。まさか、一日2回更新するとは思っていませんでした。

第12話　頼ってくれ

姫様が来たその翌日の朝の事だった。

なにか改まってサイトが僕の部屋にやってきたのだ。

何事かと思い聞いてみると、いきなり彼の世界で最高の頼み方『土下座』で一緒についてきて欲しいと頼まれたのだ。

いや？なににとか思ったのは内緒だ。

第12話　頼ってくれ

なんでも、姫様の命令でアルビオンに行かないといけないらしい。それは、災難だと言ってあげると、どうやら僕に付いてきて欲しいらしい。

「ああ、いいよ。他ならぬ才人のお願いだからね」
そう、才人は僕の友達だ。

だから、僕は彼の頼みを聞こう。
一度得たものは大切にする。それが僕の性分だ。

「それは助かる！それじゃ、今すぐ校門に来てくれ！」
そう言って、また飛び出していく。

今すぐって・・・流石に用意とかが少しあるんだけど。

寝巻きから制服に着替える。

杖をベルトにさし、刀を鞘に納め腰に巻く。

少し、髪を整える。そして、最後に挨拶。

「じゃあ、そういうことだから、行ってきますマリア」

「はい、言つてらっしゃいませルーラ様」

ペコリとお辞儀するマリア。

そして、僕の後を追いかけるフェルノ。

所変わって校門。

「もう！何やってんのよバカ犬！ルーラなんてどうでもいいのよ！才人はルイズに説教されている真っ最中だった。」

「でも、ルーラって強いしさ、頭も結構切れるし・・・」

僕のことをそんな風に思っていてくれたのか、なんか嬉しいな。

「んなわけないでしょ！あいつはなんて私に比べればぜんよこのバカ犬！」

まったく、僕のことをどう言おうがいいが、僕の友達しかも自分の使い魔をあそこまで罵倒するのは少しいただけないな。

「ルイズ、そろそろ才人のことを人間として扱ったらどうだ？そして、才人はキミのことを守りたくて僕を呼んだんだよ」

嘘かもしれないが、ある意味本当だろう。

人数がいればいるほど狙われる可能性は減る。

最悪の場合盾として使える。人数が多くて悪い事はそこまでない。

港町まで一緒に行くくらいは価値はあるだろう。

「ふん！いいのよ！それにこれは私の使い魔よ！私がどう扱おうといいじゃない！」

後半の部分はスルーらしい・・・

「まあ、どうとでも・・・」

もう、呆れるしかないという感じだ。

「やあ、君も来る事にしたんだねルーラ」

「なんだギーシュも行くのか」

ギーシュはいつもの用にバラを口に咥えながら喋ってくる。
いつも思っが、どうやって話してるんだ？

「ああ、君は言ったとおりあれはお姫様でね、その秘密任務と言うわけさ」

秘密任務ねー。

「と、いうより。そちらの貴族様は誰でしょうか？」
一応大人だし敬語を使う。これも礼儀。

「ああ、僕はワルド。ルイズの婚約者だ。」

ワルド、というところの『閃光のワルド』だろうか。

「ああ、僕は閃光のワルドと言ったほうが分かりやすいかもしれないね」

やっぱりそうらしい。なんでも風のスクエアで強い……らしい。

「そうですか。お会いできて光栄です。僕の名前は「ああ！もういいでしょ！行きましょ！」って、おいおい」

人の自己紹介を途中で切るってどうなの？人として。

ワルドには苦笑いする事しかできなかった。

まあ、どうでもいいことだ。有名な貴族なんて関わることなんてないのだ。

それから僕、才人とギーシュは馬に乗り、ワルドとルイズは仲良くグリフォンに乗った。

当然と言うべきかグリフォンのほうが馬より早い。

少しずつ開いていた差が重なり、グリフォンが5サントくらいに見えるまで離れてしまったようだ。

「なあ、ギーシュ」

「なんだいルーラ」

きつとみんな同じ思いだろう。

「これって、ひどいよな」

元々、馬について来いというほうがおかしいだろう。

「しかし、しかたないよ。僕たちでは逆らうことも出来ないよ」とほほ、背景に出てきそうな雰囲気を醸しだしている。

それからギーシュとずっと色々話した。

主に、ギーシュの恋愛感について話した。

しかし、その間ずっと才人は俯き黙ったままだった。

「なあ、才人。そう落ち込むなって。ルイズだっていつかお前の事認めてくれるよ」

そう言って、慰める事しか僕には出来なかった。

「そう・・・だといいよな」

それでも、まだ納得できないような顔でやっと前を向いた。

そんな矢先に山賊の襲撃である。
空からは矢が降り注いだ。

「危ない才人！」

僕は急いで刀を抜き才人と矢の間に入る。

「ギーシュ早くゴーレムを！」

ギーシュにゴーレム一体注文する。

その間僕は矢を切り落とす。

身体に魔力をめぐらせるイメージで。

目と腕に魔力を集める。

すべての矢を目で捉え、すべての矢を切ることができれば、
ほぼすべての矢を打ち落とす。

自分でも思うがこれって人間業じゃないよな？

「ワルキューレ！」

そして、ギーシュが作ってくれたゴーレムの後ろに隠れる。

「あ、ありがとうルーラ。でも、お前どうやって・・・？」
疑問に思うだろう。でも、教える事はできない。

「まあ、なんだ。才人、男には秘密があつたほうがいいだろう」
そう言つて、ごまかす。

「そつだね！その通りだよルーラ！君もようやく分かつてくれたかい！」

すごく賛同してくれるギーシュ。ただの言い訳だけだな。

「あら？でも私はあまり隠し事は好きじゃないわよ？」
第3者の会話への介入によって自分達の危機が去つた事を知つた僕
たちはワルキューレの後ろから出てきた。

そこに現れた人物はなんとキュルケであった。
その後ろにいるタバサを見る限り此処まではタバサの使い魔のシル
フィードで来たのだろう。

「まあ、人の好みは人それぞれってことだな、ギーシュ」
「なんだか、すごく安心してしまった。」

「まあ、そう言ってしまったら終わりじゃないかな？」
ギーシュも安心したのかもうすでに口にはバラがある。

「ありがとう二人とも。助かったよ」
先にこれを言うべきなんだが。

「誤解しないでね？私が助けたのはダーリンよ！」
そして、才人に抱きつくキュルケ。

ダーリンって才人のことが。
最近才人はモテ期に入っただらしい。

「ちい、才人お！！君ってやつはあ！」
本気で悔しがってるギーシュを見るのは面白い。

「ありがとな、タバサ」

一応タバサにもう一度お礼をする。

「この貸しはちゃんと返すからさ。何か手伝いことがあったら言ってくれ」

一応言ってみたが、どうせ断られるだろう。

「じゃあ、帰ったら魔法の訓練」

彼女は短くそう答えたが僕にはそれが意外過ぎてそこで数秒固まってしまった。

「どうしたんだいルーラ？」

ギーシュにそう聞かれた事すらも忘れていたのだ。

そうしてやってきましたラ・ロシエール。

港町と言つわりになぜか山の中にあることを不思議がっている才人に説明してやった。

「アルビオンって言うのは空中に浮いている大陸なんだ。だから此処から空飛ぶ船で行くんだよ。」

それに感動したのか才人はずっと「行きたい行きたい、早く行きた

い」で会話が成り立たなくなってしまった。

そうしてやってきたのは宿だった。

どうやら明後日まで船が出港しないらしい。

まあ、そりゃしょうがないよな。

「じゃあ、部屋割りしましょ。私とタバサは相部屋。才人とギーシュが相部屋。そして残念だけどルーラは一人部屋ね」

別に残念じゃないけどありがとうキュルケ。彼女の中では別に僕は「孤独の男」とかの像ではないらしい。安心安心。

「僕とルイズが相部屋だね」

そんなことをすました顔で言うワルドにイラついた顔を見せる才人しかし、そこはやめておけと僕が目で教えてあげる。

流石にギーシュとも決闘は子供のおふざけレベルで始末できるが、ワルドなどの有名な貴族となってくると話が別なのだ。

そして、夕飯を食べ部屋に行くのであった。

夕飯は、貴族の豪勢な食事に匹敵するものでなかったがとても美味であった。

タバサがハシバミ草を食べているのをみんなで眺めていたのがメイイベントだったな。

良くあそこまで食べれる。どこに行っているんだあの体積。身体の体積を越えてるんだが。

その夜僕はベッドに寝そべっていた。

この旅について、そしてなによりも才人について。

最近の才人の扱いはひどい。犬と呼ばれ首輪をされ、そして今度はワルドが現れる。

同情せざる終えないだろう。あれでも才人はルイズの事が好きなのだから。

見ていれば分かる。才人のルイズを見る視線は熱い。

そんな事を悶々と考えているとき部屋のドアにノックの音が転がってきた。

「はい」

そうやって、ドアを開けると、僕の目線の少ししたに青い髪の少女、タバサが居た。

「どうしたの？」

別に、会う予定もないかったし、万が一夜這いだとしたらもつつそりくるだろう。

「魔法の訓練」

え？それって学園に帰ってからじゃ。

「気が変わった」

まるで、心を読まれたかのような感覚だったが、まあ予想ができる展開だったのだろう。

そして、宿から少し離れた空き地で僕たちは杖を持って立っていた。そこには僕の使い魔のフェルノもタバサのシルフィードもいる。

「あなたみたいに動きたい」

簡潔に言われた要求だったが、それは無理だ。

「無理だ」

僕も簡潔に言っただけだ。

「なぜ？」

「あれは魔法じゃない。呪いだ」

まあ、詳しく言う呪いではない。しかしここで正直にアイテムと言ってしまうと指輪を欲してしまうかもしれない。

「そう・・・」

少ししょんぼりしたタバサを見た。

ここに来て始めて彼女の感情らしいものを見た。

「タバサ、君はなんでそこまで強くなるんだい？」

「言えない」

ばつさり切り捨てられた気分だ。

「そうか」

でも、そこまで聞くわけにはいかないのだ。深入りしすぎて戻れなくなるのはいやだ。

「じゃあ、組み手をしてみないか？」

組み手は分かりやすい。ゆっくりやっても成果がでる。

「わかった」

そうして、僕たちは組み手を始めた。

こうすれば、こう。

こっちにすれば、こっち。

そんな風に一つずつ動きを教えていった。

動きが早く出来ないのなら動きを最適化でもするべきだ。

そして、相手の手が読めればなおよし。そうすれば、いくら相手が早かろうと攻撃は防げる。

そうして、一通り終わるとタバサは感謝してくれた。

そうして、また別れて部屋に戻るのであった。

「フェルノ知ってるか？青髪って言うのはガリア王家の証なんだよ前、文献で読んだ。」

『そうなのー？じゃあ、タバサはガリア王家？』

「そうなんだろうね。まあ、何か事情があるんだろう」
そう、人には事情がある。人に話せないようなものもある。それは仕方ないことだ。
それを知りたいのなら、相手が話してくれるまで待つだけだ。

そして、その日僕はその事情を10通りくらい考えて寝た。

次の朝、キュルケに会ったときやけにニヤニヤしてたのは目の錯覚だろう。

「あれ？才人は？」
才人がいないと気付いたのは朝食を取り終えたときだった。
そういえば、ワルドもいないしルイズもない。

「さあ？不貞寝でもしてるんじゃない？」
冗談を言う風にキュルケが言う。

「でも、部屋を出るのは見たぞ」
その可能性を削除するギーシュ。

「お髭男爵と決闘」
タバサがぼそりと言った。

「あははは！！」

「そんな失礼・・・ぷぷ」

「お髭男爵って」

そして、みんなで笑った。

「って決闘！」

そして気付いた。

「勝てないよ才人じゃ。助けに行かないと」

そう、流石に才人が速いからといって相手が悪い。

「フェルノ頼む」

フェルノ実は鼻もきくのだ。

そして、辿り着いたのは決闘が始まった瞬間だった。

「デル・イル・ソル・ラ・ウィンド・・・」

ワルドが詠唱している。あの詠唱はエア・ハンマーだ！

くっ、間に合え！

杖を取りブレイドを唱える。足に魔力を集める。そして爆散させる。まるで一瞬消えたかのようなスピードで才人の横に現れる。

それと同時に杖を振りぬく。

切り裂かれた空間にあった圧縮された空気は雲散し、才人に届く事はなかった。

「……………なっ……………」

全員が驚愕する。

彼は普通のメイジであって、才人のようにルーンがあるわけでも、ワルドのように王宮に仕える部隊の隊長でもない。

その彼が、才人以上のスピードで動いたのだ。そしてワルドの魔法を掻き消した。

「弱いもの苛めみつともないですよ？ワルド隊長」
隊長の部分強調と言う。

「なんなら僕が相手をしましょうか？ただの憂さ晴らしならかまいませんよね？」

そう、これは憂さ晴らしではない。才人でないといけないのだ。

「い、いや。もういいだろう。すまなかったね使い魔君」
そうして、ルイズをつれてそくさと出て行く。

「す、すごいじゃないかルーラ」
まさか、自分がこんなやつを相手にしていたなど到底思っていないか
ったギーシュ。

キュルケとタバサは驚いて声がでないようだ。

そして才人は完全にアウトだ。
まるで、反応していない。なにが起こったかわかっていないようだ。

「ほら、立てよ才人。剣の相手なら僕がする。そうしていつか越え
てやろうじゃないか？」
そう言っ、手を差し出す。若干涙目の才人は僕の手を掴み立ち上
がる。

そして、腕で涙を拭い、笑顔を取り戻した。

そのときの才人の顔は言い笑顔だった。

第12話、頼ってくれ（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

何か指輪でいい能力の提案があつたら感想にください！

第13話 存在を辿って (前書き)

今回は少し短めだと思います。

第13話　存在を辿って

ワルドは逃げていった後僕たちはみんなでお茶をした。
そこらへんのカフェで飲み物を買って、みんなで喋った。
悪口もあったが、全部笑えた。

そんな楽しい日常に反して僕たちに迫ってくる危機があった。
この作戦、なにかが裏にあると感じていた。

第13話　存在を辿って

時は過ぎ、今は夜。

僕は今、昨日と同じ空き地にいる。

今日は別にタバサと訓練があるわけじゃない。

ここで、僕の限界を試したいのだ。
指輪に話しかける。

「なあ、シリア」

その指輪の人物。

「なあに？」

頭に中に直接話しかけてくるこの声にも慣れてきた。

日常でもシリアは色々なことに興味を持つ。それはまるで始めて世界を見る子供の用に。

「俺つてもつと速く動けるのか？」

そう、自分の限界とはスピードの事だ。

今日のワルドの事で自分がある程度のスピードで動いている事が分かった。

そして、人生生きていれば上はまだまだある。

「うん、もつと速くなるよ」

「どうやって？」

期待が膨れてきた。しかし、この後裏切られるのであった。

「もつと魔力を集めればいいんだよ！」

そんな事は分かっているのだ。

でも、元々魔力を集めるのにはそれなりの時間が掛かる。その前に自分の魔力には限界がある。

「はぁ……」

少し期待はずれの答えを聞き落ち込むが、すぐに素振り始める。

『ご主人ー、なんだか宿のほうがうるさいよー』

フェルノが教えてくれる情報はいつも正確だ。

「なにが起こってる？」

『んー、鎧の音、あと火』

って、事は襲撃！速く向かわないと。

「フェルノ捕まって！」

フェルノが肩に乗ったのを確認し、魔力を身体に巡らせる。

少しの間速く移動したい場合、瞬間的にスピードを上げるより、身体能力を底上げて走ったほうが効率が言い事はすでに調べた。

その状態で走れば、消えるまでとはいかないが常人の2倍から3倍は速く移動できるだろう。

宿の近くまで辿り着くと、その入り口にはたくさんの兵士、もとい傭兵達が群がっていた。

宿の角で身を潜める。見ただけでも傭兵達は20人近くいる。とりあえず、中に人がいるか確かめないと。

「フェルノ、中に人はいるかい？」

『うーん、ええーと。いるよ。でも3人裏のほうから出て行ったみたい』

きつと、その3人はワルド、ルイズ、才人だろう。

この任務は数人が目的地に着けば良いらしい、と昨日ワルドが言っていた。

いざと言うときは、数人を囷に使い、他の数人が目的地に行くこともあるだろう。

そして、この任務を受けたのはルイズ、その使い魔才人。そしてその護衛というかなんというかのワルド。

そうとなれば、ここにいる傭兵を倒したほうがいいだろう。いくら、囷だといっても仲間が傷つくのは見たくないしな。

杖を取り出しブレイドを唱える。

傭兵達に近づく。

ある程度近づいたところで傭兵達が気づく。

「ああ？なんだお坊ちゃん？今取り込み中なんだよ！あっち行くな！」

あっち行けと言うわりにこっちに突っ込んでくるのはどうかと思う。

そして ごめん

魔力を目と腕に集中させる。

まず、向かってくる一人を殴り気絶。

それから、通常の状態で傭兵達に向かつて走る。

何人かはこちらに気付き、攻撃をしようとするがその動きを目で捉え避ける、とにかく避ける。

そして、隙あらば殴り一発で気絶または戦闘不能にする。

それを繰り返し、ものの数分で傭兵達を残り一人まで倒す。

そこから少し実験をする。

残りの一人は離れたところで僕を警戒している。

剣を構え、こつちが動けば切りにくるといふ雰囲気を出している。

僕は足に魔力を集中させる。そして、一直線に相手に走る。これは愚かな行動だ。

しかし、途中で自分の足の魔力を爆散させる。

そうすることで、予測していたより早く自分に到達した敵を戸惑い傭兵は動きが一瞬止まる。

その一瞬を見逃さず、僕は顔を殴った。一番気絶しやすそうだったからだ。他意はない。

宿の中にいたはずのギーシュ、キュルケとタバサがもう店の前にいる。

そちらに向かいながら、まるで何もなかったかのようにキュルケが話しかけてくる。

「助かったわ」

その一言だけで僕は救われる。

「いやあ、すごいじゃないか」
その一言で僕は自信を持てる。

「おかえり」

その一言で僕の居場所ができた。

三人に迎えられ、僕はまるで今戦場にいる感覚を忘れていた。

そのときである、地面が揺れた。

そして、後ろを振り返ると宿の外には一体の巨大ゴーレムが立っていた。

これは、絶対にあのフーケの物だ。直感で分かる。

そして、そのゴーレムの肩に乗っている人物がいる。

「フーケ！」

ギーシュその人物の名前を呼ぶ。

みんなが驚いているが、キュルケとタバサは理解したようだ。

「取引をしないか？」

僕は大声で彼女に話しかけた。

取引、等価交換。なにかを差し出し、そして何かを得る。

「はん！条件にもよる！」

あくまで気が強い女を演じるらしい。

「見逃してやる！」

そう、見逃す。今の僕達ならフーケを捕まえる事は簡単だ。だからこそ成り立つ取引だ。

「そんなの条件にならないね！」

そう言い、フーケはゴーレムを一步僕たちに近づける。

ゴーレムは所詮岩、その表面は非常にでこぼこしている。上る事は容易である。

ゴーレムが僕たちに蹴りをかまそうとしてる。

全員で散り、目標を定めさせないようにする。そして僕はその間にゴーレムの後ろに向かう。

そこから、身体強化を施しゴーレムの表面を走る。

肩を上まで辿り着くと、そこにはフーケがいた。

いつぞやかと同じシチュエーションだ。

「またあんたかい！」

そうして、フーケは杖を振り、鍊金を唱える。

ゴーレムの身体から拳が生えてくるが、その拳を刀で切り裂いていく、

そして、最後の足掻きとして彼女は杖で僕に飛び掛ってくる。

しかし、その攻撃すら僕によって無効化される。

杖を刀で弾き、杖が遥か下の地面に落ちる音がする。

その後、まいったといわんばかりに彼女は両腕を上げ、降参を認める。

そしてゴーレムを解除し、ただの土に戻っていく。

「まったく、私もやばいやつに狙われたもんだよ」

そう、毒づき僕を睨んでくる。ちよつと睨まないでくださいよ。

「で、フーケ。なんで君は僕たちを襲撃した？まさかと思うけどアルビオンとか関係ないよね？」

そう、そのまさかである。そうなれば、この任務自体がすでに失敗なのだ。

内部から情報が漏れている時点で僕たちは危険にさらされている。

「ふん、アルビオンなんて知らないね。ただ、頼まれたんだよ。あんたらをここで足止めしとけてね」

足止めと言う方には依頼主はここで倒せるとは思っていなかったのだろうか？

それなら、僕たちの実力を知っている誰か？

でも、このタイミングで僕たちに襲撃したのなら、たぶんこの任務は相手にばれている。

「そうか、分かった。解放だ、逃げてください」

そして拘束を解く。

「な、いいのか？ここで私を逃がして？言っておくがアタシはまた盗むよ？」

彼女だけじゃない、ギーシュも驚いている。

「取引ですって言ったじゃないですか？それにフーケ、君は誰かのために盗んでいるのдар？」

「なっ、なんのことだい？」

明らかに動揺していますね。分かりやすいわかりやすい。でも、よくこんなので盗賊やっていられたな。

「あなたの目はとても優しい」

そう言って彼女の瞳を見る。

その瞳は、世の中の犯罪者の腐った目ではない。

誰かのために、罪を犯すときの目だ。誰かに助けて欲しいと言っている様な目。

「さあ、行ってください。僕の気が変わる前に」

そう言って、フーケは闇に消えていった。

「さあ、どうする？この作戦は失敗だね」

みんなに振り返り一言告げる。

「なぜだい？半数目的地に着けばいいんだらう？」

ギーシュが疑問に思っているようだが、それは違う。

「すでに、この任務は外部に情報漏れしている。目的地に敵が潜んでいる可能性が高い」

たぶん、お姫様から貰った手紙や、お姫様の手紙を奪うのが目的だろう。

そして、遙か上空、アルビオンのあるである方向を眺める。
願うは友の無事。ただ、それだけだった。

服が引つ張られた感じがする。その方向、斜め下を見てみるとタバサがいた。

「行きたい？」

彼女は静かに聞いてくる。

聞いてくるあたり、彼女は自分で行く気はあまりないようだ。
行きたいのであれば「行く」と言うはずだ。

しかし、彼女が聞いてくるのだ。きっと、期待にこたえてくれるはずだ。

「行きたい。才人が心配だ」

強い意志を持って答える。

自分の本心、本当に願っている事。

「・・・分かった」

彼女は少し僕のことを見つめたあと、頷き口笛を吹いた。

そこに現れたのは一匹の蒼竜。
タバサの使い魔、シルフィード。

「乗って、追いかける」

短く言ったタバサは自らシルフィードに乗り、命令を与える。

それから僕、ギーシュとキュルケの順に乗っていく。

そうして、シルフィードが大きく羽ばたき、地面に風が押し寄せ土煙があがる。

暗い夜の中を飛び立った。

才人・・・無事で居てくれ。

僕はもっと、君と話したいんだ。

君の世界に興味がある。魔法のない、全員が平等な世界。僕も連れて行ってほしい。こんな世界僕は嫌だ。

そんなことを考えているとき頭の中に響いた。

・・・そんなんじゃないだめだよー・・・

シリアの言ったその言葉の意味を、今の僕は理解できないままだった。

第13話 存在を辿って (後書き)

なんだか、最近ケティを書いていない。でも、どうやって登場させるか迷う。

なにか書いてほしいシチュエーションとかがあれば感想にください。番外編とかで書く参考にするかもしれません。

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第14話　愛しています（前書き）

今回も割りと短めかもしれない。

やっぱり、原作キャラ視点から書くのが大変だと感じる。　tばうん、自分で作ってないからだと思う。　というか、そうだろう。　まあ、そんな苦勞を感じても書いてみました。

第14話　愛しています

第12話　愛しています

SIDE才人

俺たちは今アルビオンの城、ニューカッスル、にいる。

俺たち（俺、ルイズとワールド）はキュルケ、ギーシュとタバサ、そしてどこに行ったか分からないルーラを囷に使い棧橋に向かった。そこで船に乗り、アルビオンに行く予定だった。そして、その目的は途中で何度かの妨害を受けたが達成できたのだ。

この城にはまだ王党派の貴族達が数百人籠っている。

そして、今。まさに今、彼等は最後の晩餐を楽しんでいるのだ。

最後の夜くらい楽しく、華やかに。そして　明日名誉ある死を・

・

まちがってる。

死ぬのが名誉なんてそんなことあっちゃいけない。

生きていてこそその功績。

生きていてこそ果たせる使命。

死んで手に入れる名誉なんてなんの意味もない。

誰も理解してくれない。

なぜ、生きようとしなののか。

死んで手に入るものなんて一つもないのだ。すべてを失うだけ。

ルーラなら分かってくれるだろうか・・・

自分の一番の理解者を思い浮かべる。

他のやつらとは違う。

少し頼りなさそうな雰囲気の親友。

でも、やるときはやる親友。

俺のことを一番に考えてくれる親友。

何度も・・・救われた。

話し相手になってくれるだけで自分の不安が紛れた。

母さんはどうしているだろうか・・・

あっちの親友達は どうしているだろうか？

俺の後ろの席のやつはどうしてるだろうか？

だんだん、記憶が薄れていく中、俺はずっと不安だった。

今だって、不安だ。でも、今はやるべきことがある。

死なせたくない・・・

生きて会わせたい、会わせてやりたいんだ。

俺はまたウェールズのところに向かうことにした。

デルフはやめろやめろ言っているが、やめない。俺は最後まで俺でいる。

そして、ついたのは城の一室。ウェールズの部屋だ。

ノックをするとすぐドアが開く。

「来ると思っていたよ」

そう、静かに微笑んだウェールズの顔には、不安も、恐怖すらなかった。

いつものような、明るい、清々しい笑顔だった。

「なんでっ！」

その時点で俺は分からなくなった。

なんで、そんなに明るくいれるんだ。

なんで笑顔でいられるんだ！明日死ぬ運命なのに。

「ふふ、まだその事で悩んでいたのかい？もう、いいだろう？悩んだって意味のないことだ」

「いみの・・・ないこと？何言ってるんだよ！お前等おかしいよ！なんでだよ！明日死ぬんだぞ！生きるか死ぬかの問題なんだぞ！」

俺は分からなかった。そして怒っていた。それも分からない。何にイラついているのかも分からない。

でも、吐き出さずにはいられない。分からないことだらけだ。

「それでも・・・だよ。僕たちには此処で死ぬという役目があるん

だ。それをやらなければいけないんだ。それしかないんだ」
今度は少し悲しく囁いた。

「なんだよ役目って！人の死ぬ事なんて役目じゃない！なんで生きようとしらないんだよ！」

「君は違う世界から来たからかもしれないね・・・なら、君は知るべきではないんだ。分からなくていいんだ」
俺を見て、優しく微笑んだ。しかし、その目に悲しみがあることに俺は気付いていた。

「そんなの関係ねえ！姫様だって、お前と会いたがつてる！死んでほしくないんだよ！」

「・・・そんなこと・・・分かっているッ」
表情が一瞬歪む、そしてすぐなおる。
その一瞬の変化は一つの事をあらわしていた。
ウェールズも姫様と会いたい。

「なら、なんで会ってやらねえ！お前も会いたいんだろ！」

「・・・それはできない」
ウェールズが俯く。

「なんでだよ！」

「なんでもだ」

きっぱり言われた。

無理だ、と。

「説明になってない！」

それでも、分からないんだ。

俺には、何一つ分からない。

しかし、次の瞬間ウエールズは発言ではなく、行動でその感情をしめした。

ウエールズは俺の胸倉を掴み、勢いにのせて俺を壁に押し付けた。

「なら！君はどうする！」

その声に乗っているのは怒り。

「君が生きて愛するものに会ったときに、その愛するものを傷つけるとしたら！彼女の一番大切なものを傷つけるなら！」

「な・・・なにを」

行き成り、怒り、いきなり言われて意味が分からない。

「僕だって会いたいさ！会いたくないわけないだろう！なぜ、分かってくれない！」

「分かんねえよ・・・分かんないんだよ!!」
俺も声を荒げる。

「何も分かんねえんだよ!!」
その言葉で、ウェールズは腕の力を緩め、俺の圧迫感がなくなる。
そして、静かに俺に説明してくれる。その結末を。

「もし、僕が生き残りトリスティンに行く・・・亡命してしまったら。貴族派の標的は次はトリスティンになってしまう」
静かに、そして俺の瞳を覗きながら。

「アンの一番大切なもの・・・それはトリスティンだ。それを傷つける手助けになってしまうのだよ・・・僕の命は。だから、ここで絶つ」
そして、最後に「分かってくれたかい？」とたずねて、その答えを聞かずに自分の部屋に帰っていった。

俺は一人その場に取り残された。
時間から隔離された気分。
世界からも隔離された気分。
ここは・・・俺の世界じゃない・・・
実感したよ・・・
そして、分かった。ルーラ、お前がどれだけ俺のことを考えてくれたのか。

SIDE OUT

俺たちが城の着いたときはすでに敵の攻撃が始まっていた。
戦の臭いだ。物が焼けて、人が死ぬ臭い。

「これは・・・」

みんなその攻撃を見て放心する。
今僕たちは一つの国が滅ぶ姿を見ているのだ。

たぶん、サイトたちは城の中だろう。

ただ、僕は友の無事を祈った。

しかし、たぶんそれだけではダメなのだろう。

自分でほしいものは自分で手に入れる。心がそう訴えかけてきた。
それからの僕の行動は早かった。

「先に行ってる」

そう、短くタバサに囁いておく。

魔法使いの戦には竜騎士が絶対いるといって過言ではないだろう。

なんといっても空にいる事で戦の全貌を見渡す事ができる。

そして、空は至って安全な場所だ。

しかし、ドラゴンを飼いならす事ができるのは少数なのでその数は
多いものじゃない。

『フェルノ、竜はいるか？』

その位置を把握すればそいつらを足場に大陸までいけるだろう。

『んー、あっちー』

フェルノが答えたのはあっち、と言うあいまいな方向だったが、使い魔契約を交わして意思疎通のルーンを刻んだからだろうか。その位置は明確に伝わってきた。

そして、足に魔力を溜めて、一気に跳ぶ。

「「え？」」

二人が若干なにが起こったかわかっていないようだ。

そしてフェルノの言ったとおり跳んだ方向にはちゃんと竜がいた。

その竜に着地すると、乗っていた騎士が驚き一瞬動きを止める。その瞬間を見逃さずに僕は杖を突きつける。

「城までお願いできるかな？」

笑顔でたずねたところ、相手はコクコクとそれを了承してくれた。

そして、城に近づいたところでもう一度跳ぶ。

大陸の端に建てられた城を見ると、割と逃亡しやすいように作ったんじゃないかと思う。

城の壁に近づき、ブレイドを唱え切り刻む。

そして、城の中へと進入する。

『フェルノ、才人はどっちだ』

『んー、教会つばいところ』

フェルノが教会という単語を知っている事に驚くが、そこはまず置いておく。

『方向頼む』

そして、それから心の中で会話をしながら目的の教会らしく場所に辿り着く。

僕が入った時にはもうすでに勝負は決していたようだ。

床に這い蹲るワルド、そしてやつ腕。

そして、剣を持った才人と、気絶しているルイズ。

そして、ワルドは逃げていった。

「才人、無事だったか」

その人物を見て、俺は安心した。

俺の大事な親友だ。

「ルーラ！此処まで来てくれたのか？」

「僕だけじゃない、他のみんなだって来てるよ」

フェルノの情報によるとみんなはギーシュの使い魔を使い地中からこっちに向かっているらしい。
なぜ、こっちだと分かったかは不明であるが。

そんなことを考えているうちに、教会の端のほうの地面が膨れ、そしてそこに穴が出現した。
そこから顔を出すのはギーシュの使い魔のでかいもぐらだった。

「やあ、才人。色々大変そうじゃないか？」
そう、言って顔を出すギーシュ。

早く来い、と手で僕達を促す。
そんなときである。

「う・・・」
うめき声が微かに聞こえた。
その発生源は高貴そうな服を着込んだ男だった。
あきらかにこっちを見ている。

僕は才人に先に行っておくように言い、その男に近づいた。

「あ・・・ありがとう」
男はもうすぐ死んでしまうだろう。
でも、最後の力を振り絞り話しかけてきた。

「いや、僕に出来る事なんて何もありません」
そう、実際この人が救ってくれと頼んできたとしても僕にできるこ

とはない。

確実にこの人はここで死ぬだろう。

「いい・・・ただ、最後に・・・」こふっ

そして、血を吐く。

傷が深い・・・もって数分だろう。

「最後に言うことか？」

この場面で定番なのだろうか。

思い浮かべるのは遺言だった。

何か残したいのだろうか。

「これを・・・届けてくれ」

そして、差し出されたのは一枚の封筒だった。

そこには、『私の最愛のアリエッタ』と名付けされている。

「分かった・・・その頼み、僕が絶対やる」

そして、両手を彼の目に当て、閉じる。

「安らかに、寝てくれ」

そして、その男 ウェールズ は息を引き取ったのだった。

最後に、安心しきったような笑顔で死んだその男を僕は忘れないだろう。

彼を最後まで突き動かしたのは、愛。

僕も急いで戻ろうとすると、地面が大きく振動した。
そのおかげで教会が崩れ始め瓦礫が落ちてき穴を塞いでしまった。

『ちい、フェルノ。大陸の端は？』

そうして、またフェルノの指示によって外に出る。

もう時間がないのだ。

一か八かの賭けで僕は思いつきり

飛び降りた。

アルビオンは別名白の国と呼ばれている。

その由縁はアルビオンから落ちてくる水が大陸の下で霧状になり白くなるからだ。

そして、飛び降りた僕は大陸の下にいるわけで、視界が全くといって良いほどきかないのだ。

指を口に挟み思いつきり吹いた。口笛 これが僕の賭けだ。
届いてくれ！

S I D E タバサ

結局、彼は戻ってこなかった。

でも、死ぬ気はないだろうと予測できる。

なぜなら、彼にはそれだけの技量と覚悟があったからだ。

どんなときでも生きようとする。

嫌われようと気にしない精神力。一般的に言うメイジではない。

私たちは今空を飛んでいる。

もしかしたら、彼が穴から飛び入り手来るかもしれないと期待しているからだ。

「る、ルーラは！」

後ろで騒いでいる使い魔はキュルケとギーシュが静めているが一向に静かになる様子がない。

「うるさい」

静かに、でも少し威圧するような感じで言い放つ。

その直後だった。

行き成りシルフィードが方向転換をしたのだ。

そして、私の言うことを聞かない。これはいつも通りなのだが。

そして、白い霧の中に突っ込んでいった。

「うわっ」

前のほうで声がする。

聞き覚えのある声。

そして、白い霧から抜けるとシルフィードの口には、マントを咥えられぶら下がっている彼がいた。

「あ、ありがとう」

少し声が覚えていたがたぶん高さのせいだろう。

「おかえり」

小さく言ってみた。

SIDE OUT

なんとか賭けには勝ったようだ。

僕は今シルフィードのおかげで生きている。

と、言ってもわりと危ない状態だ。ぶらさがっているのだ。

シルフィードが口を開ければ僕はすぐまた落ちるだろう。

そんな心配をしながらも僕達はトリステインの王都につきその城の庭に降り立った。

まあ、そこで色々疑われたりしたが、そこはお姫様がどうにかしてくれた。

そして、今僕はそのお姫様の前にいる。

「どうしたんだよルーラ？早く戻ろっぜ」
帰ることを促す才人。

「何やってんのよ！早く姫様から離れて！」
相当僕のことを嫌いなルイズだ。

「まあ、待て。僕も用事がある」
そうして、手紙を取り出す。

「貴方がアンリエッタで間違いないよね」
まあ、合っているだろうが確認に越した事はない。

「はい・・・」
もうすでに落ち込んでいる状態だ。
もしかしたら、この手紙も落ち込ませるかもしれない。そんな不安も一瞬よぎった。
しかし、それでも約束は果たす。

「この手紙を預かった」
そして、その封を切り読み始めた、と思ったら泣き崩れた。

「うう・・・ん・・・ひつく」
そして、その涙を懸命に腕で拭い取ろうとしている。
しかし、その涙が僕に見せたもの、それは悲しみ、寂しさ・・・そ

して、一時の喜びだった。

その手紙を拾い上げる。

そして、その内容を見た。

一文だけ、そこにはつづつてあった。

この世で一番嬉しい言葉だろう。

愛しています

そして、それで手紙は終わっていた。

手紙をおりなおし、彼女の手の中に収める。

そして、その部屋を退出する。

「ほら、行くよ才人。ついでにルイズも。僕達はお邪魔だろう」

ルイズがついでの部分引つかかったようで文句を言ってくるがそんな事気にする気分ではない。

あんなものを読んでしまったからだろうか、早く会いたい。早く、戻るんだ。

僕は生きながら言っであげよう。

こんな悲しみ味あわせない。

心に誓った。

そうして、僕達の旅は、終わりを迎えたのだった。

第14話　愛しています（後書き）

なんと、お気に入り登録が100人を越えました！
今までありがとうございます。そして今からもよろしく願います。

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1784m/>

イチの魔法使い

2011年5月1日02時45分発行